

# あなたは死んだはずだった

「ッ——！！」

余年、神樹歴 3XX 年 12 月 3 日。

(ついに、やってしまったか…)

気を付けてはいたけれど、夜霧で濡れた枯葉たちは、車で踏み砕かれた雪のように最上の潤滑剤として働き、いとも容易く下山中の私を死の神(Thanatos)の眼前に引きずり落した。

(痛い…)

「谷底に落ちて 40 分は経っただろうか…？分からないが…」

「偶々即死はしなかった、けど、とても動けないし腰から下が氷点下の流水に浸かっている… (すでに刺すような水の冷たさも感じられない。もしかしたら背骨をやっているのかもしれない)」

「お陰で重傷の割に痛みは悶絶する程度で済んでいるが、じきに死ぬ」

(失血も合わさって酷く寒い…寒い…)

(いっそ、熊でも落石でもいいから早く死なせてくれ…)

あの場所に落下した時点で、すでに私の死亡は確実に訪れるものであり、痛みで気絶することも叶わず、防寒対策を徹底していたが故に低体温症で眠ってしまうこともできず、ただ約束の刻が来るのを引き延ばし、なぶり殺しにされていた。

(以前からそうだが、GOD は本当に理不尽で鬼畜で外道な輩だ…)

時は遡り、約 30 年前。人類を滅ぼさんと降臨した天神が勇者に打倒され、大赦が秘匿していた神と人類と勇者たちの歴史が私たち一般市民にも公開された。

その内容は凄惨で血塗られた歴史であり、止むを得ずとはいえ、ほんの数十名の女子子供に穢れを押し付け、バーテックスという神の化物と戦わせ、これも混乱を避けるため止むを得ずだったとはいえ、私たち一般人には隠匿し、最前線の勇者たちには名誉も褒美もなかったという、畜生に身を墮としたかのような実態だったようだ。

神に選定されることが名誉だというのは私にも分かる。  
だが、それにしてもだ。  
上里家が保存していなければ、存在すら抹消されていた勇者もいるという。

止むを得なかった。  
仕方がなかった。  
選択肢なんてなかった。

それでも、あんまりな話だ。  
——未だ大赦は救世主である勇者たちの情報は黙秘している。

「もし。起きるのだよ。もし」

(なんだ…いつのまにか気を失っていたか…？女声のようにも聞こえるが…今更、救助を呼ばれたところで間に合わないのだし、起こさないでほしかった)

「ほっほっほ。神が言っている。『おぬしは、まだ死ぬ定めではない』と」

(何を言っているんだこいつは)

これから死ぬという人間を前に、笑って冗談をぬかす何者かの相手など鬱陶しいので、狸寝入りを続けることにした。

「まあよい。そのまま聞かれよ」

「困難に立ち向かい、ときには挫折し絶望し、しかし何度でも立ち上がり神頼みもせず己の脚で歩き続けた、お主のようなものが好きでう」

「わしは、生まれから宿命付けられた困難に立ち向かうも特に幸福になることもなく、求めた成果も手にできないまま無情に死んでしまうお主を不憫に思い、蘇生はできぬがせめて冥途の土産に過去に送り、別の選択肢を辿った先に何があるのか見せて『あのとき、ああすればよかった。こうすればよかった』『あの子に告白しておけば良かった』というような後悔や無念を晴らしてもらおうとな？」

「永眠しようとするお主の夢枕に生えた神樹じゃよ」

「質の悪い冗談だ」と私は思った。

声の言う通り、私は連綿と続く毒親たちの家に生まれて虐待を受けていたし、小中高と程度はそれぞれだが虐めにもあっていて、家の呪縛から逃れるために県外の学校に進学するも金銭的都合であの家に戻ることであり、挫折し、半年ほぼ寝たきりの生活になったし、自分で鬱を直そうにもあの家にいる以上モラル・ハラスメントを回避することもできず一進三退の経過で「どうせこのまま殺されるなら、いっそ一族郎党皆殺しにしてやろう」と考えだした頃。

県外の兄弟の部屋に避難することで、なんとか自己治療を終わらせたが、結局、後遺症は残り、毒親に含まされた毒も残り、目標立てて貯金を始めても実家という後ろ建てが得られない大きなハンデを負う私は、派遣のバイトを転々として、折角四国外にも行けるようになったのだからと向かった極寒の北の大地で半年以上ホームレスすることになり、定期的に無職になったり、なんとか再入学・卒業ノルマを終えて、細々とであるが自営業も立ち上げて「さあ、やっとこれからだ」と動いていた半ばでこの有様だ。

(確かに、私は『そう』だった)

(だが元からそんな人生だったのだ。後悔しないために出来ることは出来るだけやった)

(後になって“よりよい選択肢”を思い付いても『それはそれ』。そのとき閃いた最善もしくは次善がそうで、そしてそれを遂行したのなら)

(私は過去の私を誇りに思い、その私の行為を無かったことにして侮辱するようなことはしない。死に際の幻聴か悪魔のささやきかは知らないが、私にやり直したい過去など無い)

「うむ……………それでこそじゃ…。だから人間は素晴らしい…」

「益々気に入った」

「意に沿わないかもしれんが、その不遇な運命を負わせることになった一柱からのお詫びとでも思って受け取っておくれ————『おまえ。タイムリープしてね?』————」

は？

（さっきから脳内会話が成立していて気が変になりそうだが、今の長台詞無視する流れなのか？…ちょっとまで、なんか足の感覚が戻ってるし寒くないし痛みも無いし青々としたイネ科の草の匂いがするし目を開けると見知った讃州市にある公園にいるしどういことだ！」

私は忌々し気に閉ざしていた眼(まなこ)を開口し、人目を忘れて途中から叫んでいた。

慌てて周囲を確認する。

(んむ。見える範囲には誰も居ないな。…セーフ)

「お姉ちゃん、公園で何か叫んでる人がいるよ…？」

駄目だった。トイレの建物の影に隠れていた。

「やいやい、ちょっとお！」

「公園で奇声を上げて、うちの可愛い、とても可愛い妹を怖がらせた不届き者は誰!？」

「もー…止めてよ、お姉ちゃん。恥ずかしいよう…」

「犬吠埼さん…？」

「あら？転校生の氏紙(うじし)君じゃない。どうしたの？」

「お姉ちゃんのお友達？」

「いや…ただの同級生です」

そこに居たのは中学の頃の同級生で、勇者部という名の讃州中学ボランティア部の部長である犬吠埼 風(いぬぼうぎき ふう)と、その妹の犬吠埼 樹(いぬぼうぎき いつき)だった。容姿も中学の頃のままに驚いたが、冷静になると私の視線も下がっている。本当に、お節介でタイムリープさせられたのか…

人の話を聞かない辺り、悪魔というより神っぽくあるが、どうだか。

犬吠埼姉妹を「不意に過去の恥ずかしい記憶を思い出して叫んでしまったのです」などと一部事実を織り交ぜた説明で誤魔化して、現状の確認のため“あの家”への帰路を歩く。

(とても気が進まないが、義務教育期間中の私ではトランクルームもクレジットも契約できないし、そうする他ない。止むを得ない)

現状、確認できているのは

- ・私が讃州中学三年生の頃に回帰していること
- ・いくつかの、ここにあるはずのない私が死に際に持っていた物が鞆の中にあること
- ・バーテックスから四国を守る壁が健在なこと
- ・勇者部はいつでも、どこでも、どんな相談でも受け付けているということ
- ・犬吠埼姉は、改めて見ても美人であるということ
- ・犬吠埼妹は、とても可愛いということ

…追加で「神を名乗るやつは碌でもないということ」と「都合が良いのか悪いのか“あの家”が消滅していること」だ。

(なんだ? 『家族と和解して来い』とか、そういう無意味で、高慢で、傲慢な、全くつまらない発想で過去に送ったわけじゃないのか? それは良いが、どうしたものか…)

野宿も問題ないが、これは、やり直すどころではなく完全に詰んでいる。“お詫び”とか言っていなかったか あいつ。喧嘩売ってんのか。そうなのか、ふぁっきん・ごっど。

「学生証の住所は変わってないから、ここで間違いないはずなんだが…困った」

「携帯は電池切れか…“引っ越したけど、住所変更手続きが未了”という可能性も無いとは言い切れないし、一応、明日は学校に行こう」

とりあえず河川敷へ行こう。河川敷にホームレスが住み着くのは、あの場所は「キャンプ(野宿)しても法的に問題ない場合が多く、橋の下なら風雨をしのげて、また、通りすがりに通報され難い」と都合が良いからである。

公僕さま方は心配だからと、貯金が残っていれば部屋を借りることを勧めたり、貯金が無ければ生活保護の案内をしたり、せめてとネットカフェの利用を推奨して下さったりするが、いつ収入源が確保できるか分からないのに部屋なんて借りてしまえば、忽ち干上がってしまうし、生活保護の申請を行うと戸籍から血縁者を検索されて「引き取れ」と連絡が行くため元被虐待児童である私には都合が悪いし、ネットカフェは悪くない案だが、入

っても結局寝ずに漫画を読み耽ってしまうので寝床にするのは難しい。銭湯があるので30分シャワーを浴びるためだけに利用することもない。

結論すると、私にとってホームレスが安牌なのだ。

日付が代替わりをして、ここは懐かしい学舎の職員室。

私の現住所を確認すべく、元担任教師に「実は昨日、道に迷って家に帰れませんでした。携帯の電池は切れてしまうし、住所が書いてある学生証も何処かに落としてしまうので、この分だと今日も帰宅できないと思うので、ちょっと地図を書いていただけませんか？」というように、物覚えが悪い困った学生の体で頭を垂れて、昨日消滅を確認した場所が記された地図を手に入れることに成功した。

「もしかしたら、家出の線で学校に連絡が入ってるかもしれないと考えたのだが…これは、完全に抹消されていると考えるのが妥当か」

ある種の毒親の習性として“世間体を気にする”とか、“自分のことを善人だと勘違いしており純粋な善意で実子の人権を徹底して踏み躪る”とか、“卑屈で世間様に迷惑をかけることを過剰に嫌悪する”とか、“悪意を自覚しており虐待の通報をされては困ると監視する”などがある。

私の家も手前勝手に独りよがりな善意を押し付けて、子を搾取し殺すタイプだったため、彼らが存在しているなら必ず学校へ連絡があったはずだ。

「おーい、氏紙君。昨日は災難だったわねー」

「掘り返さんでください」

「今日は、どうしたのおー？難しい顔で職員室から出てきたりしてえ？」

昨日、彼女が言っていたように、私は中二のときに親の都合で引っ越してきた転校生であり、犬吠埼姉とは元同級生という程度の関係でしかないが、彼女は面倒海が良く、人も良すぎるため、困っていそうな人を見つけると、こうして演技がかった口調で絡んで来たりする。

不可思議なことに犬吠埼姉に「彼氏がいるという噂」は聞かない。

こんな美人で気さくで、面倒見がよく、ついでにスタイルも良く、人格も素晴らしい娘に気を引かれない男は居ないはずだろうに。よく隠し通せているものだ。

それはそうと住所の件だが、既に手詰まり感が拭えないので、勇者部にも相談してみようと思う。実際を如何こうできるとは思わないが、彼女たちの人脈の広さと情報収集力は一介の中学生とはとても思えない。

「ぷっ、ふふっ。自分の家に帰れなくなるなんて筋金入りの方向音痴ね」

「良いわ。今日は私が一緒に帰ってあげる。放課後とくに用事が無いなら勇者部で寛いでてもらっても…あ、いや、女の子ばかりの空間に男子を独り放り込むのも申し訳ないか」

「いや、うちの美術部も、ほとんど女子しかないし私は気にしないけれど」

「そう…？ほんとに？」

犬吠埼姉が訝しげに見つめてくる。不味ったか。

無いと思いたいが、質の悪い女好きとでも受け取られてしまったかもしれない。

いや、中学生でその発想は無いか。

「分かったわ……………しかし……………」

「そうねえ、あの空間に単身突撃する“ある意味勇者”な氏紙君を称えて、仮勇者部員の称号を進呈しよう…ふっふっふ…」

「よく分からないけど、それは名誉なことなんですかね…？」

(妙に含ませるな…)

(女子ばかりと言っても、精々男女比率が女子 100%で総員 5~6 人って程度だろうに…)

私は犬吠埼姉の、あの勿体付けた含み笑いの意味を理解することとなった。

(あの家が消滅している時点で、単純なタイムリープではないことは分かっていたはずなのに…まさか……まさかこんなことになっていようとは誰が予測できただろう…)

そこには、決して狭いというほどではないが、だからと言って特記するような広さがあるわけでもない家庭科準備室(件勇者部室)に………何人だ？……数十人もの美少女たちが収容されていた。

(このサプライズは、おふざけが過ぎるぞ神よ…)

女子特有の、甘く脳を侵す芳香が部屋いっぱい満たされており、それだけでも動揺を隠せなくなっているというのに、室内にいるのは犬吠埼姉にまったく引けを取らない美女美少女の群れである。

(こんな場所に私を放り込んでどういうつもりだ GOD…、生涯独身で死んだ私を憐れんだつもりなのか？こんなもの生殺しにしかならんだろう…)

そして、憐憫の結果のこれだとしたら大層悪趣味だ。

「勇者部ちゅうもーく！」

部長である犬吠埼姉の号令で数十名の目鼻の整った人間たちが静まり返り、この部屋の異物である私に視線を突き刺してくるため非常に心臓に悪い…。

「今日は！」

「なんと！」

「男子の勇者部入部希望者を連れてきましたー！！どんどんぱふぱふー！」

想像し得る精いっぱいの、明るく軽量の紹介によって場の緊張を解こうという、犬吠埼部長の面倒見と人格の良さが、挙動不審に陥った私の心臓を慰めてくれた…。そういうところ、ほんとすき…人として感動せずにはいられない。誰だってそう思うはずだ。

「「な、なんだってー！？」」

「ほっほーう、この女の園に単身入部希望とは勇者やなあ」

「昨日の人だあ」

「まあ。それはそれは」

「今日の今まで影も形も無かったのに…いったい何処から連れて来たんスカ部長！」

「そうよ風。その男子どこから攫ってきたのよ」

「ああ。よろしく頼む」

「いやー、すごい動揺してるし大丈夫かじゃあ…」

「フッ、弥勒は動じないわ」

「おおお、これは嵐の予感がしますなあ、そのっち」

「これは血の雨が降るかもしれませんねえ、そのっち先輩」

「！？園子先生！それはもしかして、もしかするということですか園子先生！？きゃあ！」

「あ、杏ー？落ち着けー、あーんずー？」

「いやあ…逆の立場で想像すると、恐ろしくて恐ろしくて私絶対泣いちゃう」

「そんなことなくとも、雀さんはいつも鳴いておりますでしょう？」

「うん」

「私も雀先輩のように想像してみましたが、すごく緊張してしまうと思います」

「わ、私も絶対無理だと思う…同性でも上手く喋れなかったのにそんなの…」

「ノープログラムよ！みーちゃんには、あたしが着いてる！！」

「私も…ちょっと無理かも…知らない男の人にこの人数で囲まれるって…」

「あ、あの方、大丈夫でしょうか…」

「殿方には、そういう趣向の方もいると聞くけど…そんな風には見えないものね」

「犬吠埼部長、お役目のときの説明は大丈夫なんでしょうか？」

「えっ！？あ、ああ！！だ、大丈夫よ！ たぶん…」

「乃木若葉だ。 まあ、ともあれ、女子しかいない勇者部に男手が入るのは助かる。できれば続けてほしい」

女三人寄れば姦しいというが、これはどうだろう？

30人近くが集合しては、もはや收拾が付けられないのでは？

なんだか現実感というか当事者感が失せてきた。きっとこれは死に瀕した体が、苦痛や恐怖を忘れるために多量の脳内麻薬を分泌して見せている長く長い幻想。臨死体験というやつなのだろう。きっとそう。いや、そうに違いない。あの家が私に都合よく消滅しているのも説明が付く。であれば、あの声は私の――

「やー、ごめんねー」

「いや、あんなに部員が増えているとは思わなかったけど、確認しなかった私の自業自得よ」

「知らずに連れ込まれたんですね…」

「なんなら本当に入部してくれてもいいのよー？」

「ふふ。もー、無理言っちゃだめだよお姉ちゃん」

「ごめん☆テヘペロりんちょ☆」

確かに肩身が狭く思うが、どうせ夢なら、より愉快的な選択をしてもいい。

今日一日だけでも、ほとんど勇者部員全員が彼女のように、呆れるほどの尽きぬけた善人なのがしっかりと伝わった。人に失望して見限り AC(adult children)特有のお試し行動も辞めてしまった私でさえ、人間もまだ捨てたものではないなと感じてしまう。

これが現実であったなら、彼女たちが【尊く = 素晴らしく = 愛しい存在】であるほど、私とは関わらせなかつただろう。彼女たちを手助けるために必要になったとしても、間接的にか、気付かれないように遂行する。

「次の角を曲がって四軒先が氏紙君の家ねー」

「そのはず」

「『はず』って何よ『はず』って、あたしを信用しなさいな」

「犬吠埼さんを疑っているわけではないよ」

「私だって毎日この道を通って通学していたのだから」

「???よく分かんないわね。それってどういう」

「あれ?お姉ちゃん道間違えた?」

「え?」

そこは間違いなく“あの家”の所在地であったはずで、そこには昨日私が帰投予定だった空き地があるだけだった。

=====

「いや、だからって、こんな状態で放っておけるわけないでしょ！！」

「だからと言って、そこまで犬吠埼さんの厄介になるわけにはいかない」

「じゃあ、先生方をお願いして…」

「もし、そうするとしても私が一人でやるよ」

「…っ、あんたねえ！」

「確かに私も心配だけど…お姉ちゃん…」

割愛するが、ここまで献身的だとは部室に行くまでは予想だにできなかった。しかし、こうなってしまうよなあ…どうしたものか。生前も「私にとって取るに足らない些事が他人にとっては重大な事件だ」ということがよくあった。

価値観の相違、クオリア(感覚質)の相違は言葉にしても伝えきることはできない。どちらかが協調するか、柔和するか、多くの過去の私たちのように「人間とは分かり合えないのだ」と諦める以外に選択肢は無い。極力傷付けない言葉を探しているけれど…

「とにかく、カラオケでもコンビニでも適当なところで夜を明かすから、今日のところはもう犬吠埼さんは帰宅したほうがいい。これから一息(ひといき)に夜が更ける。ご両親が心配するだろう？」

嘘だ。

私はカラオケにもコンビニにも寄らないし、このように他人を心配して激を飛ばすような人間は、また他人の自らに向けられる心配を無視できない…これは受け継いだ毒を用いたマインドコントロール。相手を気遣っている風ではあるか、有無を言わさぬその言葉は相手の人格や主張を無視した命令と変わらない。思い遣りも、善意も、独りよがりでは駄目なのだ。

ほら…この通り、黙り込んでしまった。…すまない。

「……………わよ」

「…お姉ちゃん？」

「うちは、両親とも、もう死んでいないわよ…」

「変なこと聞かせて悪かったわね」  
「樹も、もうそんな心配しないのっ」  
「でも…お姉ちゃん…」

泣かせてしまった。  
当たり障りなく、確実に解散させようと選んだ言葉が鬼門だった。  
また大事な人を切り捨ててしまった。  
よりもよって、大事に思っていたのだろう両親を事故で亡くしたという相手に…

私はいつもこうなんだ…。人を好ましく想い、近くに寄れば寄るほど致命的に、取り返しが付かないように心を抉ってしまう。これが毒親に教育された、少なくない割合の毒子たちに共通して存在する呪いだ。

故に、故に…本来的には傍にいるべきではないのは分かっているが、あのまま捨て置いてしまえば私たちのような呪いに罹って、もっと凄惨なことになる。それを感知してしまうのも私たち故……。私は犬吠埼姉を放っておけず、彼女たちの自宅まで同伴し、言われるがまま晚餐を振舞われてしまっている…

痛々しい彼女の空元気が私を罪悪感で動けなくする。

「それで一、どう？」

「ん？」

「勇者部よ、勇者部。正式に入らないかって話一」

やめてくれ…

「さては、密かに憧れてた同級生の……び！じ！ん！な！！同級生のおいしい手料理に気を取られて聞いていなかったわねー？大丈夫、大丈夫よ！分かってるからっ！でも御免なさい。そういうことはまだお互いのことをよく知ってからじゃないと」

やめてくれ…、私を罪悪感で殺すのは構わない。

だが、そんなことのために自傷行為のようなセリフを吐くのは止めてくれ…

「お姉ちゃん…氏紙さんが困ってるよ？」

「そうよね…私が美人で料理上手なのがイケナイのよね…およよよよ」

「犬吠埼さん」

「ん。なに？」

「私なんかを部員にしていいのか？後悔しない自信はあるのか？」

「いや間違えた。すみません」

「正直に言うと、私が(周りを傷付けないように)上手くやっていく自信が無いんです」

「大丈夫よ。ちょっと反りが合わないことがあったって、みんな良い子たちだもの」

「そうですか…(また通じていない気がする…)」

「この前も男の子ならではの意見が必要な依頼があったし、勇者部として最低限一人は男子が欲しいところなのよね」

「どうして私にそうまでして勧めるんですか？その役は私である必要はないでしょう？」

「…今日、初めて氏紙君と色々話してみたけど、なんだか知らない価値観に触れたような…私たちには無い意見を生んでくれる。そんな気がしたのよ」

それは…そうだろうな…

組織の代表者が自らの盲を埋めるために、自らと正反対の性質の人間を副任に就ける例がある。それは理に適っているし、確かにあることだ。あることではあるが…しかし…

「さっきのことなら、別に気にしなくていいから。ね？」

「言い合ってるうちに昂って泣いたりしちゃったけど、何も間違っただけとは言っていないわ。貴方は悪くないわ」

(いいや違う…それは違う…。必ずしも必要だったわけではないのに怠慢を働いて、反論させないために“忌むべき毒を意図的に使用した私”は間違いなく悪いんだよ…)

「…分かった。そこまで推されて断るわけにもいかないし」

嘘だ。

私は他人の推薦も期待も意に介さない。ただ…

「ほんと?!」

ただ…

「ありがとう!!」

「それに犬吠埼さんは美人で、スタイルが良くて、料理上手で、妹を溺愛してて、面倒見がよくて、気さくで、母性的で包容力があって、家庭的で、料理上手で、性格が良くて、人望があって、呆れるほど突き抜けて人が良過ぎて、人格者で、実はひっそりと憧れていた笑顔が素敵な、かわいい同級生の女の子だしね。そんな娘に迫られて断れる男はいないだろう」

「・・・びゃ!?!?!」

「ふえ!?!」

——今は達成感と褒め殺しで、数刻前の忌まわしい記憶を散らしてあげるべきなんだ。



「落ち着いて落ち着いて大丈夫だから…お姉ちゃんが隠してる事なんてないから…」

「あ、は、また、すみません…」

「じゃあ、また明日ね？お姉ちゃんを宜しくね？」

「はい…おやすみなさい…」

新しい朝が来た。  
希望の朝か、はたまた野望の朝か。

昨日はとても濃い一日だった…。あのあと、犬吠埼姉は元に戻ったのだろうか…。彼氏が  
いる前提で吐いた言葉だったので心配になってきた…

あ。

「お…おひゃようございまひう…！」  
駄目だった。混乱状態の犬吠埼妹みたいになってる。

「おはようございます…。大丈夫ですか…？」  
「だ！？大丈夫よ！？大丈夫ってなに！？ななななんのこと！！？」

どうしよう…あの犬吠埼姉がこんなに免疫が無かったなんて…手に余る…  
「お、おう…じゃあ放課後に…」

へるぶみい……

「あゝあゝっつ！？昨日お家に帰ってから、チョメチョメの大きなうねりでガイアが地響  
きを上げているのを感じる！…のに！この両の眼で確認できないのが切ないよゝおゝおゝ  
おゝおゝわっしいゝいゝいゝいゝ！！！！」

「そのっち……」  
「おはよー！園ちゃん！」「東郷さん！園ちゃんに何かあったの？」

「なんのことかしらね…私にも分からないわ、友奈ちゃん…」

「そっかあ。昨日と言えば新しい勇者部員だよなー」  
「もう、友奈ちゃんったら、あの人はまだ仮入部よ♪」

「ガ タ ッ ！ ！ 」

「うーわあ！びっくりした！」

「どうしたの、そのっち。また突然大声を出したりして」

「ゆーゆー…それだよ、ゆーゆー…」

「私としたことが、あまりに強いチョメチョメの波動に、無意識になっちー辺りかなと除外していた人選…新入部員…間違いない。間違いないよ。ゆーゆー…」

「？なんだかよく分からないけど、園ちゃんの悩み事が解決したんなら良かったよ！」

「これは迅速な調査が必要だぜ……」

「(そのっちが生き生きしだした…)また変な思い付きで、仮入部の方にご迷惑をお掛けしなければいいけど…」

「あんた達、教室で騒ぎすぎよ」

「あ！夏凜ちゃんおはよう！！」

「はい、おはよう友奈。今日も一段と元気ね」

「おはよう夏凜ちゃん。実はそのっちが…」

=====

「わっしー！ミノさん！」「おはよう！！」

「おはようそのっち」

「なんだー？園子が、もう起きてるなんて珍しいなー」

「ふっふっふ。実は実は実は！！」

「さっき、園子先輩から連絡が来て、昨晚からずっと気になっていたことが腑に落ちたところなんよー」

「あっ、いつものテンションに戻った」

「昨晚から気になっていたこと？」

「ああ、そう言えば晩御飯の後、なんか荒ぶってたな園子。あれか」

「へへへー。ミノさん、せいかーい。昨晚からずっと感じてたチョメの鼓動の発信源が分かったのー」

「チョメの鼓動？」

「ええっ！」

「きゃ//」

「そんなことが//」

「んー？なに見てるのあややー」

「あっ、雀先輩、おはようございます」

「うん。おはよー。それで何見てたのー？」

「実は、樹ちゃんからこのようなメールが」

=====

「おはようございます。しずくさん。雀さん。今日も高貴な私(わたくし)が迎えるに相応しい…ちょっと聞いてますの雀さん？」

「あーうん。おはよー弥勒さん」

「私が来たときには既にこの様子で…変」

「心ここに在らずという具合に遠くを見つめて黄昏ていたりして、なんだか気味が悪いですわね…」

「おはよう。しずく。弥勒さん。雀」

「おはよう」「おはようございます」「あ！おはようメブー！」

「さっき何か話していたわね？何かあったの？」

「それが実h「あのねあのねメブ、みんな聞いてよ！！」ちょっと雀さん！私の台詞に被せないでくださいまし！」

「どうしたの雀？」

「ふっふっふ……」「あのねー？それがねー、あのねー？風さんがねー？」

「随分と勿体付けますわね…」

「なんと、風さんにモテ期が！」

「…なんか物凄いことを立ち聞きしちゃったにゃあ…」

「風に…モテ期？」

「うああ！棗さん、いつからそこに!？」

「風は……良妻賢母だ…皆に好かれるのは当然だろう？」

「そ、そりゃあその通りだけど、どうして棗さんが自慢気に…」

「えー？なにになにー？風先輩がどうかしたのー？」

「二人とも、おはようさん」

「おはよう」

=====

「まあ♪」

「へー、風のやつがなー。ついにかー」

「園子先生の第一報によると、お二方は…樹ちゃんも一緒ですが」

「一昨日、偶然公園で出逢い」「昨日、仲睦まじく職員室の前で談笑しているのを日直で回収したプリントを提出に来ていた生徒が目撃し、恐らくそのときに風さんが勇者部に勧誘。部活の後はそのままお互いの家に挨拶を終えて、夕食もご一緒していたとか！きゃあ!//」

「昨日の今日でそこまで…」

「少し信じがたい進展の速さだが、そういうものなのだろうか？ひなた」

「さて、どうでしょう？確かに早いですが、一目惚れだったのかもしれませんが、こればかりは個人差がありますから…」

「その情報、園子さん出だそうだけれど、信憑性はあるのかしら？」

「確かにそうですね…」

「でも、夕食をご一緒したというのは樹ちゃんから伺ったそうですよ？」

「樹さんから？」

「でも、もし違ってたら悪いよー、風先輩に確認してみよ？」

「うむ。千景と友奈の言う通りだな。噂話に花を咲かせるのもいいが、今回は男子生徒も巻き込んであるんだ。ほどほどにしておくんだぞ、杏。

「それと、園子たちにも連絡が来たら伝えておいてくれ…GPSで身割れするのを避けるためにスマホの電源を切っているのか、先ほどから繋がらないんだ…」

「そうですね…今回は男子生徒が絡んでいるんですもんね…軽率でした。  
園子先生たちにも、ちゃんと伝えておきます」

悪名と噂話は、音速を超えて千里を疾走する。

あとで知ったことだが、畑の水やりに出ていた二人を除いたすべての勇者部員が噂を耳にするのに15分とかからなかったという。

=====

「だから、違います」

「えー？誠にござるかあ？」

「変だなー。間違いなくチョメの風を肌を感じるのにー」

止めてくれ…自分が蒔いた種ではあるが、これ以上、犬吠埼姉を刺激しないでくれ……  
切実に…。噂が通り過ぎるまでの75日間もの間、耐えねばならないのだろうか…慈悲は  
無いのでしょうか…

「あた、あたたたた、あた、あたっ??」

「すみません皆さん」

「お姉ちゃんの羞恥心が限界みたいなので、今日はもう連れて帰ります」

「私も一緒に行こう。風が心配だ」

「わ、私も！」

「そうか。樹、風さん、棗さん、夏凜。また明日」

「お大事にー」

「ねえ！ねえ！いい線行ってると思わない！？マジだよこれ！マジなやつだよこれ！」

「せやなあ、火の無いところに煙は立たん。何かがあったと考えるべきや」

「風先輩、可愛かったよねー」

「わ、私、もう胸が高鳴って…」

否定しても最早止まらないだろう。人間は事実をではなく信じたいものを信じるのだ。

——一転気。見目麗しい婦女子たちの、華々しくも居心地の悪い喜色と黄色い声で満たされた室内に、物々しい警報音が鳴り響く。そして彼女たちの、勇者たちの小さな双肩に負わされた重過ぎる役割を、私は知ることになる。

「みんな！おしゃべりは、あいつらを片付けてからにしよう！」

「DUST to DUST...何百何千何万の軍勢だろうと、すべて塵に還してあげるわ…」

「なんていうかもう、日課みたいなもんだよナー」

「タマっち先輩。強さはそこまでじゃないけど、回を増すごとにバーテックスの数が増えてきてるんだから油断は禁物だよ」

「わーってるって、心配性だなあ杏は一 …何体でもタマに任せタマえ！」

「勇者たちよ！私に」「！？ま、まって若葉ちゃん、あれ！」

「っ！？…どうした友奈？」

「なんだ、ここは」

「あら。ニューフェース君も来てたのね。男手が増えて助かるわ！」

「いやいや、彼、勇者じゃないし戦えないでしょ」

「あら、そうなの？風さんが連れて来たから私、てっきり…」

「彼は我々防人組が保護します。なので、皆さんはバーテックスを」

「やった！てことは今回、前線に出なくていいってことだよねメブー！」

「…これまでも神樹様に御呼ばれたひとはいたけど、今回はどうしてかなー？」

「あれは…バーテックス」

「それに、勇者…？」

「そう。勇者部とは世を忍ぶ仮の姿…」

「しかしてその正体は！」

「世界の愛と平和を守る美少女戦士だったのです！」

「大体あってるけど、園子たちのノリに着いてけてないぞー」

「えー？」「だめー？」

「一先ず、説明は帰ってからにしましょう？敵が動き出したわ」

人が宙を駆け回り、襲来した蛆虫の群れを想起させる幾万の神の化物が咆哮を上げ、レーザー砲が天を割り、必殺の五月雨が降り続き、巨大な緑に覆われた大地は鳴動し、神の鉄槌が神の化物を粉碎する。恐ろしくも美しい神威を振るいし殺陣を眼前に、そのとき無力な人間はただ目を奪われていることしかできなかった。

=====

「少女たちだとは言っていたけど、まさか、小中学生が勇者だったとは…」

「まあねー。びっくりだよねー」

「あれー？勇者やバーテックスのことを知ってたってことは、やっぱり大赦関係の人だったのかな？」

「それで何かの手違いで樹海に紛れ込んでしまったのかしら？」

「そういえば、硬直してはいたが、あの多量のバーテックスを見ても怯えた様子は無かったな」

「座学知識でバーテックスを知っていた防人に選ばれた子たちも、初任務のときの恐怖で脱退者が出るほどだったのに」

「ええと、順番に…」

「先ず、私は大赦関係者じゃありません」

「けれど紛れ込んだのは少し心当たりがあります」

「怯えが無かったのは守られていたのもありますし、なにより戦闘に見惚れていたからです」

「心当たりというのは？」

「…ちょっと不思議な体験をしたことがあります」

「不思議な体験？」

「…ええと」

「話し難いことなら無理に話さなくても大丈夫ですよ？」

「どんな突拍子の無いことも、ここの人たちは信じるし馬鹿にしたりしないから大丈夫よ」

「…えっと、実は …ある日、神樹を名乗る何者かが夢枕に生えて…」

「…園子」

「わ、私じゃないよ?!」

「そのっち…」

「えーん、信じてもらえなーい！」

「日頃の行いの結果だな…どんまい園子」

「いや…声は似てたような気も」

「ええ!？」

「やでも、そのあと『不憫なお前を過去に送ってやる』とか言われて、そうだったので乃木さんではないと思います」

「未来から来たの!? 何年後!? …ですか!」

「ほんとに信じてる…」

「えっ、嘘なの!？」

「いや、嘘ではないけど、ただの夢か幻覚だと思わない？」

「実は私たちの多くは、過去から神樹様に召喚されているんです。なので、未来からも十分あり得ることだと思います。神託が無かったのは気になりますが…」

(過去から? ということは)

「もしかして、乃木さんは」

「はい。僭越ながら初代勇者を名乗らせていただいています」

「私はその子孫の乃木園子 (中学生バージョン) です!」

「私もその子孫の乃木園子 (小学生バージョン) です!」

「変だとは思っていたけど、過去と未来の同一人物ですか…」

「実は須美も、名前は変わってますけど、東郷さんの小学生バージョンなんすよ」

「ええ…じゃあまさか親戚にしては瓜二つで、似すぎてるなあと思ってた結城さんたちも」

「あっ、いえ、私たちはその…何だっけ赤嶺ちゃん！」

「えーと、私たち友奈は、神樹様に友奈因子を付与された其々の時代の友奈…かな？」

「なるほど」

「もう分かったの！？今聞いても、私よく分かんないのにー」

「友奈ちゃんは友奈ちゃんだから、気にしなくていいのよ友奈ちゃん」

「そうかなー？」

「それで結局、氏紙さんは何年後から来たのでしょうか？」

「30年後くらいですかね…」

「三十円！？…じゃなかった」

「30年って、30年経ってもその身長のままだったのかー！？」

「驚くところなんだ。いや、私も見た目が変わってないみたいなのは気になるけど」

「30年後…ということは、未来30年先までは神樹様は無事ということね」

「これから神樹様の寿命を延ばす儀式が行われるということなののでしょうか？」

「いや、神樹様は」

神樹は天の神を撃退した代わりに滅び、人類は生存し領土を取り戻す。

だが、未来の情報を話しても大丈夫だろうか…？

バタフライ・エフェクト。毫釐の差は千里の謬りとも言う。

顕現した天の神そのものを打倒するなどという、奇跡としか考えられない成功を口にした  
りして未来が変わってしまったら？

人間を見限った私としては、人類が生存しようと絶滅しようと“どうでもいいこと”ではある。むしろ「人類など亡びればいい」とさえよく思う。しかしそれは、単なる生物種的絶滅ではなく、彼女たち勇者の敗北と同義であり、彼女たちが天の神に惨殺されるということである。

人類などどうにでもなればいいが、忌々しき GOD に私の大事な人たちをグチャグチャにされては堪らない。それだけは承服できない。『絶対に』許さない。…たとえこれが彼岸を渡る刹那の時間を、薬物で無限に引き延ばした幻想でしかなかったとしても。だ。

これまでと変わらない。

後悔しないために

- ・できることをできるだけ行い
- ・やるからには徹底的に、殺す気で行い
- ・変更を含めて道の選択は可能な限り早く決断し
- ・質に取られないために、何かが無くてはならないという状態をしらみ潰し
- ・可能な限り公正に、己に誠実に、そして矛盾無く
- ・己の大事のために役割に殉じる

「神樹様に何か…？」

「いや、これは今は、秘密にしておきます」「私がここに送られた余波なのか、この時期に私が住んでいた家が消滅したりしていますので何が起こるか」

「い、家が消滅！？じゃあ、氏紙さんのご家族の方は…」

「さあ？一緒に消し飛んだんじゃないですかね。それはまあ、どうでもいいんですけど」

「どうでもいいわけないだろう！それに、家が無いなら！」

「落ち着いてください若葉ちゃん。あくまでここは新樹様の中の世界ですから、ただ召喚されていないだけなんだと思います」

「あ…そうか、すまない…」

「だが、それでも、家族が突然いなくなってもどうでも良いなんてことはないんだ…そんな心にもないこと言わないでくれ…」

「乃木さん、他所の家の事情にあまり口を挟むべきではないわ。そういう人もいるのよ」

「千景……、でも、寂しいじゃないか…」

「あの、お家が無いってことは、今どこに住んでるんでしょうか…？」

「野宿です」

「ほほう、毎日キャンプしてるのかー」

「そいつは「タマっち先輩！こっち！！」杏ー！？どうしてタマを抱っこして！あー！」

マジメオハナシテルトキニ、フザケチャダメダヨ！タマハイツダツテシケンダー…

「…神樹様に関わっていることですから、自宅の件や生活面は大赦にお願いすれば手配していただけたと思います」

「そうですか。助かります」

「ですが少し…いえ、他に困っていることや悩み事はありませんか？」

「そうですね…犬吠埼さんの名誉のためにも、あの事実でない噂が早々に消えてくれるとありがたいですね」

「…分かりました。園子さん」

「うっ…ごめんなさい」

「別に怒っているわけではないですし、元々自分が蒔いた種で、悪いのはすべて私ですから、そんな顔しないでください」

「でも…」

(あーもう、苦手だなあこういうの)

「私は私の作業を邪魔されるか、大事なものを毀損される以外では、基本全てが些事で取るに足らないどうでもいいことなので、本当にそんな顔しなくて良いんです。それに美人の泣きそうな顔なんて、私が居た堪れないだけで誰も得しませんよ。謝るのなら笑ってテヘペロするくらいのノリでというかむしろ謝らなくてもいいのでテヘペロしてほしい」

「うゝうゝ、ありがとうございます…」

「氏紙さん…？」

「はい」

「自分が蒔いた種というのは、どういう意味でしょう？」

「先程の会話で乃木さんを怒らせてしまったように犬吠埼さんを怒らせて、その上うっかり無神経なことを言って泣かせてしまい、罪悪感から言われるがまま犬吠埼家の晩餐をご馳走になり、励ましのつもりで、全力で犬吠埼さんを褒め殺したら、目的は達成されたけれど想定外に犬吠埼さんに免疫が無く、あれよあれよといつの間にか手に余る規模の噂に成長していました。すべてわたくしの軽率な言動の結果で大変申し訳なく思うところであり如何なる誹りも厳罰も受け入れる所存であります。すみません。すみません。すみません。あと事態を回収していただきありがとうございます御座いましたあ！！」

「はぁ…もう、困った方ですね」

「実年齢 30 歳も上の男の人をあんな風に謝らせるなんて…」

「水都さん？」

「ひっ、なんんでもありません」

「すみません。あれは別に上里さんだからではないので、そんな怖がらないであげてください…これ以上、私の罪状が増えてしまうと困る…」

「はぁ…氏紙さんも気を遣って下さるなら、あんな謝罪の仕方は止めてください…」

「すみません…」

「ひなタン。大赦からお返事来たよー」

「どうでしたか園子さん？」

「んーとね。勇者たちが使ってる寮には入れられないから、大赦関係のアパートの一室を手配するってー」

「万が一で、女子寮に入れられてしまう心配は免れたか…よかった」

「樹海に行ったことや神樹様による霊的事象の調査協力の代価として、生活費も支給してくれるみたい」

「至れり尽くせりだな」

「はー！もう自分が怒られてるわけでもないのに緊張してつーかーれーたー。お腹も空いたー！」

「私も変な汗かいちゃった…」

「すみません…」

「調査協力報酬で月 12 万入るみたいですし、お詫びに皆さん全員に何か奢りますよ」  
「ええ！？いいんすか！やったー！」  
「えー…ただ、居ただけの私たちも良いんですかー？」  
「加賀城さんたちは樹海で私を護っていたでしょう？後のことが無くてもお礼しますよ」

「いやー、さすが大人の男性は太っ腹ですなー！いよっ男前！」  
「それはやめてください」  
「そうですわよ、雀さん。貴女の褒め方は下心見え見えで却って気を悪くさせますわ」  
「ここは、名家の令嬢である私が殿方の立て方というものを「いえ、それもやめてください」 どうじでですかの！？」

=====

「お姉ちゃん、大丈夫ー？」  
「ええ…。ごめん樹、やっと落ち着いた…」

「まさか、あんな熱烈に口説かれるなんて思ってなかったから…」  
(おねーちゃん……)

「モテる女は辛いわね…」  
(どうすればいいのかわかんないよー…！氏紙さーん…！！)

=====

「はっ！？」  
「どないしたんや？うっちー」  
「(うっちー…)いや、ちょっと閃いただけです」  
「ほー？何を閃いたんや？」  
「秘密です」  
「なんでやねん！」

翌日、噂の箆口令(かんこうれい)の協力のおかげで、どうにか犬吠埼姉を会話が通じる状態に留めることに成功し、私の肩書から(仮)が外れて正式に勇者部に転入した。

「ハロー、氏紙さん」「これから赤嶺さんと、休ませてた畑を耕しに行くところなんだけど、よかったら貴方も一緒にどうかしら？」

「はい。いいですよ」

「ありがとう！男の子だけど、華奢だから断られると思ってたわ♪」

「まあ、確かに筋力は大したことないし、多分腕相撲で勝てるのも勇者部内では犬吠埼の妹さんと藤森さんと上里さんくらいだと思いますけど、耕すのに必要なのは主に、重しの扱いと円運動と梃子の原理で筋力ではないので」

「あら、よく知ってるわね！もしかして貴方も畑をやっていたのかしら！」

「土木の現場作業員くらいですかねー」

=====

「ハロー赤嶺さん」「準備は万全かしら？」

「はろー。レンチも一緒にいいかなー？」

「大歓迎よ！」

「フッ。たとえベンベン草しか生えないような土地でも、肥沃な大地に変えて見せるわ」

「氏紙さんも一緒なんだー。よろしくねー」

「どうも」

「あら歌野じゃない。これから畑？」

「ええ！そうなの！夏凜さんも一緒にどうかしら！」

「手伝ってあげたいけど、今日はパス。先約があるのよ」

「それは残念。氏紙さんが来てくれるから友好も兼ねてと思ったのに」

「氏紙が？」

「こんばんは」

「まだ昼過ぎよ」

「ありがとう御座います」

「いや、何のありがとうよ。意味分かんないわよ」

「ええまあ、特に意味はありませんから」

「無いんかい！」

「実はあります」

「もう！なんなのよ！」

「今日も可愛い三好さんを拝見できたことを神樹様に感謝していたのです」

「ばっ！？かわっ?! な、なに言って！」

「冗談です。では」ノシ

「ふざけるなあああー!!!!」

「あ、三好さんが可愛いというのは単なる事実を述べただけです」

「ふああああ!??」

=====

「もう駄目よ。あんなに夏凜さんをからかっちゃ」

「叩けば鳴る素晴らしいツッコミでした…そしてかわいい」

「そうやって、みんなに粉かけて、風先輩もやっちゃったんでしょー？」

「誤解されそうな言い回しはって、人のこと言えないけど」

「文字通り、手当たり次第で良くないわよ」

「言うて、誰かとかくっつくようなことは有り得ないから気にしてないんだけどなあ」

「一部の人は妄想が広がるって喜んでくれるし」

「ほんとに、あり得ないのかなー？みんな可愛いんでしょー？」

「可愛いからこそ無いんですよ。たとえ天神が許しても私が許しません」

「敵の親玉を引き合いに出すほどなの…ね」

「むしろ可能性を断っているからこそ、皆さんのような美人美少女目白押しの勇者部で正気を保っているんですよ。正史では私、生涯独身ですし」

「また、サラッとそういうこと言う」

「ええ？いい人は居なかったの？」

「さあ、どうでしょうね？ そんな余裕は、ありませんでした」

「そういえば、氏紙さんが未来で何のワークをしていたのかとか知らないわね」

「うーん…ちょっと長くて面倒なので転送直前のことだけ話すと」

「ふっ、弥勒は聞かなくても分かるわ」

「下山中に湿気った落ち葉に足を取られ、高所から凍てつく川に落下して死にました」

「ホワイ！？仕事じゃないじゃない！それに死んだってダイ！？どういうことよ！？神樹が夢枕に生えたって言ってたじゃない！」

「嘘は言ってませんよ？ただ、正確に言うと『永眠しようとしてたところに神樹を名乗る何者かの声が語り掛けてきた』となるだけです」

「えー…勇者たちの中にも、元の時代に帰れば、半数はバーテックスにやられるかもしれないけど葛藤があったのに、軽っ」

「まあ、生きていれば死にもするでしょう」

「それは…いつかは死ぬでしょうけど、そういうのとはなんだか違って聞こえるわ」

「歌野は帰ったら死ぬって言われても『自分で何とかする。何とかならなくても託します』だったけど、それとも全然違うし」

「だって、正直に言ったら絶対また怒らせませんもん…私は他人の評価なんて気にしませんけど、別に皆さんに精神的嫌がらせがしたいなんてことはないんですよ」

「海よりも広く深い弥勒の慈悲で許してあげるから、懺悔なさい」

「かくかくしかじか3ページ目で私の死亡の事実とか誠にどうでもいい」

「怒るわよ」

「許されなかった！？」

「ふふっ冗談よ。歌野の畑に着いたわ」

「レンち、どっちが先に耕し終わるか競争しようよ！」

「弥勒は負けないわ」

「そういうことなら諏訪の農業王も負けられないわね！」

「まあ極力頑張ります。………だめだツッコミがない」

「[[「よーいドン！」]]」

=====

「くっ、さすがに歌野は早いなあ」

「ふふっ、ありがとう。みんなのお陰で楽しかったわ」

「氏紙も意外と頑張っていたわ。弥勒が褒めてあげる」

「ありがとう御座います」

「夕暮れだし、今日はこれで解散ですかね」

「あっ、わたし良いこと思い付いた」

「今日はこのメンバーで、氏紙さんの部屋でご飯にしようよ」

「みーちゃんも呼んでいいかしら？」  
「んー、いいよー」  
「ならシズさんも呼んであげましょう」  
「私の意見は…」  
「だめかなー？」  
「駄目ではないですけど、いややっぱりちらかってるし」  
「風先輩と樹ちゃんとはご飯したのに、私たちとはだめなんだー？」  
「はい…喜んでお相伴(しょうばん)に上がらせていただきます…」  
「フフフ。ありがとうー」  
「片付けも料理も弥勒に任せなさい」  
「ずぼらだから散らかるだけで片付け自体は得意なのでご勘弁ください弥勒様」

=====

「ふーん？それで、うっちーとどこで集合やったんか」「災難やったな、うっちー」  
「本当にいいんでしょうか…」  
「これも自分の行動の結果なので…それに可愛い女の子たちに囲まれてのご飯なんて、本来お金を払ってお願いするもの。頑なに断るもの失礼よね」  
「そ、そうですか… (この人なんだか怖いよ、うたのん…!)」

「じゃあ、レンちに呼ばれるまで私たちは筋トレしてようか！」  
「ええっ!？」  
「赤嶺さん！それは、この農業王への挑戦と受け取ったわ！今度は何で競うのかしら！」  
「うたのん!？」  
「いや農作業の後で元気だねえ、じいちゃん若い子たちにゃ敵わんわあ」  
「さり気なく戦線離脱してる!？」  
「ええキレしとるでー、みとりん」  
「なんのことですか!？」  
「さあ、水都も一緒に筋トレやろうよ！」  
「どうして、どうしてこんなことに…うたのん…」  
「うたーのーん…!」

今夜の晩御飯は弥勒さんカレーです。とても美味。

「ふう……。カレー、おいしゅうございました」  
「生ハムとアボカドとトマトのサラダ。おいしゅうございました」  
「カツオの叩き。おいしゅうございました」  
「バニラアイス。おいしゅうございました」  
「水。おいしゅうございました」  
「藤森さんの涙と嘆き。おいしゅうございました」  
「ごちそうさまでした」

「なんですか最後の！？ひどいですよ！！」  
「はっはっは。よいではないか、よいではないか」  
「ひどい…色々と酷いい…」  
「ちょーっと、戯れが過ぎるんじゃないかって？氏紙ボーイ！」  
「さすがにボーイって歳じゃあないんだけど」  
「うたのーん…！」「みーちゃーん！」  
「うたのーん！」「みーちゃーん！！」  
「あ、集合住宅なので程々に」

=====

「歌野と水都は帰って、シズ先輩はいつの間にか寝ちゃってるし、お開きかあ」  
「うん、じゃあ送ろうか」  
「いいよー、さっき歌野たち送ってきたばかりでしょー？」  
「惚れて通えば千里も一里。気にしなさんな」  
「んー？どういう意味の諺かなあ？」  
「惚れた相手を想って通うのなら千里の道も一里と変わらんって意味」  
「まーた、懲りないねえ…」  
「これが私の役割で、同時に役得でもあるからね」  
「私の譚言も気にしなさんな。齒の浮く口説き文句を垂れたところで、小学生男子が格好付けを楽しんでいるのと変わらんのさ」

「んーでも、言ってることは本気なんだよね？」  
「みんな、よくこんなのを信じるね」  
「嘘なの？」  
「嘘は吐かないよ。人を騙すのに嘘を吐く必要なんかないからね」  
「真面目に答えてよ」

「厳しいなあ…」

「私は」

「【私は勇者部員全員を愛している】これは本心で、嘘偽りない事実です」

「【誰とも一線を越える気はない】これも本気です」

「でも押しに弱いよね？」

「好きな相手に嫌われる分にはともかく、傷付けるのは極力避けたいので…。でも」

「それでも線は守ります」

「どうして？」

「むしろ何故こんなことを聞くのでしょうか…」

「周りを案じているつもりで、結局それは周り全員を傷付けることになるからよ」

「レンち…」

「そう…なんでしょうか…」

「私には分かりません…ごめんなさい」

どうしていつも、こうなるのだろう。

何度シミュレートしても、こうになってしまう。呪わしい。

「病む…」

一昨昨日も、一昨日も、昨日も、私は最低だった。

それでも問答無用に日は登って沈むし、時間は止まらないし巻き戻りもしないので、卒業まではこの教室に通わねばならないのである。学年が異なるので遭遇することは稀ではあるが、どんな顔で赤嶺たちに会えばよいのか放課後が来るのが怖い…

「いや、たぶん生まれたときから病んでるか」

この組には勇者部員が一人も在籍していないことだけが微かな救いだろうか。皮肉い。

「あゝ ～～どうしろというのか、どうしようもねえし、救いようもねえ…」

「氏紙一。次、体育だぞー」

「ういっす…」

諸行無常。時は止まらず、良いも悪いも事態は変容し続けるし、何者も一つの状態に留まることはできないのである。体育は別のクラスと合同の授業だ……むりぼ

「っても、男女別だから心配するほどでもなかったか。せーふ」

「あら、何がセーフなのかしら？」

デジャヴ！！

「こんなところで何をなさっておられるのでしょうか郡さん…」

「誰かさんがフラグを建てていたから回収しに来たのよ」

「…冗談よ」

「なんて顔をするのよ…」

おじいちゃんの心臓は既に限界なのです。おのれ不良娘め。

「そう…。ハーレム王でも目指しているのかと思ってたわ」

私は某らぶるの主人公先輩ではないのでラッキースケベの呪いには罹っていないし、これまた某妖怪温泉宿のチートスペック霊能者先輩でもないので風が吹けば霞のように掻き消える蜉蝣(カゲロウ)のごとき矮小な小人で、また彼らのような善人でもありゃせんので、そんなものを目指そうものなら某誠君よろしく刺されて死にますでしょう。

「謙遜も過ぎれば卑屈なだけよ」

買いかぶりすぎで御座います、お嬢様。

「少なくとも悪人ではないでしょう？」

どうでしょう？悪人を気取るつもりもないけれど「こいつはくせえー！」と無自覚な最悪最低の下衆外道認定が下される可能性も無きしにも非ず。個人的には割合あると思う。

「はぁ…暖簾に腕押し、糠に釘ね…」

ごめんなさい

「犬吠埼さんが貴方を私たちとは異質なものとして求めて、貴方自身も、こうなることを分かっていたのでしょうか？なら腹を括りなさい」

知識で分かっているけど、認知できなければ如何にもならんのですよ。

「それを含めて。よ」

「厳しいことを仰る…」

「無理難題を言っているのは私も分かってる。けれど、そうする他ないでしょう？」

どうにもならんものを、どうにかするしかないからどうにかしろとはご無体な…

どうにもならんやないですか…

「それでも戦わなきゃ、無抵抗に殺されてしまうだけなのよ」

「貴方も勇者の肩書を負うのなら存分に足掻きなさい」

可能かどうかは関係なく、成そうと体が動いてしまうのが“勇者”か…

遠いなぁ…妬ましい。

“ルールと自己暗示”(プログラム)で動いてるだけの私なんかとは全然違う。

「私も偉そうなことは言えないけど、相談とか話し相手くらいにはなってあげられるから頑張りなさい。ちゃんと見ててあげるから…」

「優しいんですね、郡さん…」

「そうでもないわよ」

「いいえ。私は皆さんのことを、どこか頭の隅で『子供だから』と侮っていました」

「けれど実際に対面してみると貴方たちが神に見初められた理由が分かります。貴方たちのような素敵なお人なは他にいない」

「買い被りすぎよ…でも、ありがとう…」

=====

とはいえ、どうにもならん事実は変わらず、私は勇者(かのじょたち)でもないで、このままギンギラギンさり気なく学校を更けてしまおうかという欲望に駆られるも、それは格好が付かないので滑稽な格好付けたがりの私は逃避行には出られず、されど踏み込み切れもせず、放課後の勇者部室前で格好悪くうろうろぐるぐると立ち往生していた——

「何をしているの？」

「こんばんは、楠サン」

「“こんばんは”には、まだ早いわ。部活に来たのでしょうか？早く入りなさい」

サー…

二人に遭遇してしまえば、もう退路は無く、どうにか言い包むしかなくなるので恐る恐るといった具合に身構えていたのだが、どうやら今日はまだ防人組しか来ていないようだった。

「おはようございます」

「あ、氏紙さんにメブー、こんにちはー」

「おはようには遅い時間ですわよ、氏紙さん」

「こんにちは…」

「芽吹先輩。氏紙先輩。こんにちは」

軽く挨拶を済ませ。事前に設置しておいた私のまいふえぱりっと(教室の隅に置いた机)に着く、設置のときに「わざわざ机を用意しなくても」とか「そんな隅っこじゃなくて近くに寄せましょうよ」とか「そんな離れていたら会話に入りづらいだろう」とか「せめて椅子だけにしましょう。邪魔よ」とか言われたが、それでは会話に巻き込まれてしまうのではないか。

ここでは彼女たちから話しかけてくるし、彼女たちが善人過ぎて誰であろうと自然と警戒が緩み口数も増えてしまうが、私は本来無口で、恋人どころか死ぬまで友人一人いないボッチなのだ。それに密集しては私の作業ができない。

「それは何を彫っているんですか？」

「骨です」

「骨？」

私はボッチなので、生前、一人遊びから派生して絵を描いたり木工を覚えたり色々していた。今作っているのは、人骨を模った人形(ヒトガタ)の骨組み部分で、骨が揃ったら腹部に綿の腸(ワタ)を容れ、水粘土で筋肉を一本一本貼り付け、乾燥したら服を着せて完成となる。

「え、なにそれ呪いの儀式みたいで怖いんだけど…」

「たしかにまるで、ごーれむ？でも造っているようですわね」

「皮膚は作らないんですか？」

「変わったお人形さんなんですわね」

呪物なら私は蟲腸容れるし、粘土には自分の血を練り込む。皮膚は面倒くさい。

「えー…氏紙さんが怖いよ、メブー…」

「人の趣味を、とやかく言ってはだめよ、雀。たしかに変わってるけど」

「可愛いお人形さんだったら嬉しいですよ♪」

「説明から既に怖い…」

「夜の学校…誰も居ないはずの家庭科室から、低いうめき声のようなものが聞こえて『誰かいるの?』と、あなたはもしかしたら人が倒れているのかもしれないとガラス越しに教室を覗き込む。ぺち…ぺち…と小さくて濡れた何かが床を移動しています…。『なんだろう』と目を凝らすとそれは人の形をしていて無茶苦茶に手足をばたつかせながら不気味に移動する土人形…!」

「ひっ…」

「あなたは自分の常識から外れたそれに対し、自動車事故で臓物が散乱し、元の形がころうじて分かってしまう程度に憎く無残にひしゃげた犠牲者を偶然見てしまったかのような得も言えぬ恐怖と嫌悪感を催した——全身の血の気が引いて“カッ…”小さく物音を立ててしまった…」

「いや…やめて…」

「『しまった』慌てて土人形が居た場所に目を向けてもそこには何もなく、どこにいったきつと見つかってしまった、早く早く早く逃げないと!!あなたは駆け出そうとして………なにか柔らかいものを踏み…激しく地面に身を打ち付け………」

メ、メブー…メブー…メブー…

「…恐る恐る足元を見やると 「ゴルア` ア` ア` ! ! ! !」

「しずくが初めてバーテックスに襲われたとき並みに怖がらせるたあ! どういう了見だ!! 誰だ! ぶっ飛ばしてやる!!!!」

「…はあ` はあ` 心臓に悪いですわ、シズクさん。雀さんも泡を吹いて気絶してしまいましたわよ…」

「亜弥ちゃんまで泣かせて……」 「氏紙さん」

山伏さんが素敵に怖がってくれるのでつい調子に乗りすぎましたごめんなさい拳で人間をmも吹っ飛ばす力でぶっ飛ばされたら死んでしまいますごめんなさい寝技ならむしろご褒美ですけどそういう問題でも「歯あ！食いしばれ！！」ゴフウ…！

「自業自得ね…」

歯を食いしばれと言われたのに、殺人的なエネルギーを乗せた拳を、真っ直ぐ一切ぶれることなく鳩尾に深く突き刺された私は、私が泣かせてしまった国土さんの提案で、加賀城さんと共に速やかに保健室へ搬送された……「初めて怪談を聞いて楽しかったです。でも、ちょっと怖かったので、今度は怖くないお話を聞かせてください」のコメント付き。  
国土さんマジ天使。

=====

「ウヴー…」

「足音が…足音が………メブー…」「めーぶうーっウヴヴ………」

「気絶してしまった先で悪夢を見ておられるとは…」

「今回はさすがに、雀さんを不憫に思いますわ……泣きっ面に蜂というやつですわね」

「そうですね…しばらく休ませてあげましょう」

「亜弥が無事だったのに、しょうがねえなあ」

「私は芽吹先輩が抱きしめてくれたからで、でなければ、きっと私も雀先輩みたいに気絶していたと思います。今も芽吹先輩に手を離されると不安で…」

「大丈夫。何が出ても私が亜弥ちゃんを守るわ」

「ありがとうございます、芽吹先輩♪」

「はっ!？」「知らない天井…じゃない、保健室だここ…」

「あっ、大丈夫ですか？」

「倒れるときに何処か打ち付けて痛いところとかないですか？」

「そ、その声は氏紙さん…」

「はい。私です」

「氏紙さんだけ…？他のみんなは？」

「私と加賀城さんを担いで保健室に搬送したあと、2~3 言話して部室に帰りました」

「ええ〜心細いよおー…というかなんで氏紙さんも担がれてるの、加害者じゃん！」

「いえ…山伏さんに…」

「もー、ほんと、止めてよね！私怖いのか駄目なんだからあ…！」

「すみません…」

「バーテックスは大丈夫なんですか？」

「大丈夫なわけないじゃん!?メブが守ってくれなきゃわたし死んじゃうよ!!!」

「神樹様もなんで32人いる防人隊から一番弱い私を召喚したのか分かんないよお!!!」

「ぎゃあああ!?ごめんなさいiiiiii!!!」

樹海化警報が鳴った。

瞬く間に艶やか(あでやか)な樹海へと様変わり、異様に大きく見える月が世界を神秘的に照らしている。周りには加賀城さんしかいないが今回は死ぬだろうか。…というか無手なのに毎回樹海送りにされるのね。理解した。

「ええー…どうして、レーダーにみんなの反応が無いのー…」

「まさか、私だけ中立神に追試される…？」

「無理だよ。死ぬ、死ぬ、死ぬ！わたし死んじゃうよ！！鬼畜だよ！」

役には立たないだろうけど私もいるよ。

「氏紙さんと二人っきりで何か月も過ごすの…？その前に死ぬと思うけど、なんで…？どうして私にそんな仕打ちをするの…？私なにか悪いことした…？誰も私を守ってくれない…？どうして…？死ぬ……？」

加賀城さんがいつもと打って変わり、静かに泣き出してしまった…

それはまあ…仕方がないよなあ。守ってもらわなきゃ死ぬって泣き付く相手も居らず、まだ中学生なのに自らの死を確信していて、生き残ろうにも、いつ終わるとも知れない時間を見ず知らずの男と二人きりで過ごさなければならない。

中立神とか言っていたが、あんまりな仕打ちじゃないかこれは…

「加賀城さん」

「気持ちは痛いほど分かりますが、今のところバーテックスも見当たりませんし、隠れながら周りを伺えるようなポイントが無いか探しませんか？」

「いいよ…どうせ死ぬもん…」

「いざとなったら私を身代わりにしてくださって構いませんし、ここでの私の命は貴女のもので。不意打ち一回分くらいなら私が死ぬだけで守れます。なので、とりあえず、この退路が全くない場所から移動しましょう？」

「なんでさ！身代わりになんて出来るわけないじゃんか！」

「私は誰よりも弱くて！何もかも怖いけど、そんなことしないよ！！」

「私を何だと思ってるのさ！！！」

「…ひどいよ！」

ううむ…

「すみません…そういうつもりで言ったんじゃないんです…」

「加賀城さんが他人を見捨てて生き残れるような人だとも思っていません」

「ただ単に加賀城さんを死なせたくなくて」

「私の取れる行動の内から、加賀城さんを一度でも守り得るものがそれしかなくて」

「私の命などより貴女の命が遥かに重い…」

「私にとって貴女が掛け替えのない、大切に大事な人だからです」

「氏紙さん…でも」

「なのでもう問答無用。貴女を死なせないために引き摺ってでも移動させます」

「ええ！？」

「ほら行きますよ。立ちなさい、そして生きてますよ」

「なんで！？」

「いまさっきの感動的な台詞は！？ダジャレ！？なにこの落差！？」

「だって貴女ツッコミ粹じゃないですか。このほうが気も紛れるでしょ」

「たしかにそうかもしれないけど！！」

「…いやいや、だからってこれは無い！絶対に無い！！」

「えー…あんまりだよお…」

樹海に軟禁されて一週間が経過したが、今のところ星屑が数匹徘徊しているくらいで、他の勇者たちの救助も未だ現れない。

しかし追試もなにも、護盾型戦衣の加賀城さんでは星屑一体であろうと戦えない。盾殴り(シールドバッシュ)でも習得しろというのだろうか。…いやいや。

「氏紙さーん！今日も星屑3匹しか居なかったよー！」

「この調子なら生き残れるかも！」

「え？攻撃方法？」「無いよー？わたし盾だもん」

もしかすると、もしかするかもしれない。少数でも星屑(ターゲット)が居るということは、“生き残れ”もしくは“討滅しろ”ということなのだろう。生存なら以前の試験でパスしているというし、やはり攻撃方法を持つということの可能性が高い。実際、隊から切り離されて袋小路にでも追い込まれてしまえば彼女は詰む。

そして現環境は、ある意味巨大な袋小路に一人で囚われているといえる。

逃げるにしても最低限の反抗手段が無ければ、隙も作りづらいだろうし必要だろう。

「えー…そんな危ないことしないで、このまま安全にリミットを待とうよー」

課題を放棄しているのを見て、痺れを切らした中立神は何をすると思う？

「いっ…、でも怖いし、きっと死んじゃうよ…」

受け売りだし、私に言えた義理ではないが

「それでも戦わなきゃ、無抵抗に殺されてしまうだけなんですよ」

「いつか本番で同じ状態に陥ったら、何もできずに死んでしまいます」

「いま、このタイミングで習得するしかないんです」

「そんな…そんなの無理だよ。できないよ…」

ツタと枝で作った鳴子が鳴り響き  
殺意の込められた巨大な口が加賀城の背後に突如出現した。

鳴子が鳴って3秒もなかった。  
まるで初めからそこに居たかのように突然…

だからこれは仕方が無かった。  
止むを得なかった。

私は反射的に加賀城雀をバーテックスの口内へ押し込んだ——

気が付くとそこは病院で。

両足に固定器具が取り付けられていて、周囲を見渡しても加賀城は居ない。

「あの状態で私が死なないとは思わなかったよな」

窓の外からは神々しく輝く満月が私を覗いている。

「月が綺麗ですね」と一言、私以外に何者もない病室で呟いて眠りに落ちた。

翌日。私の意識が戻ったという知らせを受けた勇者部員数名がやってきて「どうして、あんなことをしたんだ」「どうしてお前はそうなんだ」「どうして」と幾つか詰問を受けるも、「とっさに」とか「反射的に」とか「それが最善だと思った」とか、いつものように不満足な返答しか返せなかった。

=====

「どういうことなのかしら…」

「ぐんちゃん？」

「加賀城さんは既にテストを受けたはずだし、彼に戦う力はない。妙だわ」

「うーん、神樹様からお詫びに送られたって言ってたけど本当かなあ」

「園子さんは彼が嘘を吐いたと思う？」

「ううん。多分それは本当だと思う」

「だけど本人がそれを望んでいなかったり、家が無くなっていたり、こんなことになったり、神樹様の真意は何処なのかなって」

「そうね…。また、試されているのかしら…」

「彼自身が私たちへの新しい試練の可能性は、私も考えてる」

「…不愉快だわ」

「でも、だとしたら神樹様は、私たちに何をさせようとしてるのかな？」

「『30年後の勇者が送られて来た』というわけでもありませんしね…」

「うーん、まだ分からないけど、フーミン先輩が言ったことが正解なのかも」

「犬吠埼さん？何か言っていたかしら？」

「正式に勇者部に入れるときにね。遠くて、勇者部に新しい価値観をもたらしてくれるはずだよって」

「たしかに、そんなことも言ってましたね…それじゃあ」

「神樹様も、もしかしたら、そうなんじゃないかなって、帰って来たチュン助の話を聞いて思ったの」

=====

「雀！検査がすべて終わるまで大人しくしてなさい！」

「で、でもメブー！氏紙さんは勇者でも防人でもなくて神樹様から何の力も貰ってないのに、身を挺して私を守ってくれたんだよ！？会いに行かせてよー！！」

「だから誰も会うななんて言ってないでしょう！検査が終わるのを待ちなさいと言ってるの！」

「やーだー！！待ーてーなーいーよー！！みんなは、もう面会してるのになんで私だけー！」

「やれやれ…落ち着きなさいな雀さん。レディオが騒いで、はしたないですわよ」

「いいもん！そんなことより命の恩人にお礼するのが大事だもんんん！！」

「そのように騒がしくされては、氏紙さんの傷に障りますわよ？」

「ぐっ、」

「ふう、弥勒さん助かりました」

「いえいえ、雀さんが命の恩人に粗相をせずに済んで良かったですわ」

「ぐうう…弥勒さんに諭されるなんて…」

「雀。何があったのか、もう一度説明してもらえる？」

「えっと、だから保健室で氏紙さんと話してたら樹海化警報が鳴って、何故か氏紙さんと二人きりで…メブも居ないし誰も私を守ってくれないし死ぬって泣いてたら、氏紙さんが励ましてくれて…」「星屑が何体か居るだけだったけど、私は戦えないからそのまま二人で一週間樹海で過ごして……」

「そういえば、氏紙さんに『盾でも戦えないと同じことがあったら今度こそ死ぬぞ』って言われて『私が怖いから無理』って答えた途端にバーテックスが現れたような…」

「それで、そのとき氏紙さんが私をバーテックスの口の中に押し込んでくれたおかげで、私は噛まれずに済んだの。でも代わりに氏紙さんが噛まれて…」

「助けなきゃって思って、早く病院に連れて行かなきゃって思って」  
「もう無我夢中で、怖いのも痛いのも忘れて」  
「氏紙さんに言われたとおりに盾で星屑を殴って倒してたの」

「ありがとう雀。やっぱり雀の訓練メニューに盾の素振りを追加すべきね」  
「メ、メブー…？盾は木刀みたいに振るものじゃないんだよー…？」  
「重さも木刀の何十倍もあるんだよー…メブー…？」

「そうね……肩と腰回りを中心に筋トレも増やしましょう」  
「メブが鬼だよお…」  
「楠。加賀城。検査終わったみたい」

=====

「失礼します…何してるの雀」  
「いや、いざ会うってなると緊張しちゃって…氏紙さん大丈夫ー？」  
「加賀城さん」  
「氏紙さん、雀を助けてくれてありがとう御座いました。氏紙さんが居なければ雀は今ここに居なかったかもしれません。重ねてお礼を言います」  
「いえいえ」  
「氏紙さん、その、脚は大丈夫？治りそう？」  
「うーん、粉碎骨折ばいからどうかな。まあ神経が駄目になっていなければ」

「ごめんなさい！」

「治らなかったら私が一生車椅子押すから…！」  
「いや、そこまでされなくても、最近のは電動式があるし」  
「電動式でも階段は登ば……登れないよね？…登れるのメブ？」  
「さすがに登れないんじゃないかしら…」  
「だ、だよね！？だから私が車椅子押すよ！」  
「まあ…じゃあ、そのときは頼みます」  
「うん！任せてよ！！」

「雀さん？外まで聞こえてましてよ」  
「うえ！？」

「こんにちわー！結城友奈がお見舞いに参上しました！」  
「こんにちわー！チュン助との甘くて切ない一週間の物語を聞きに来ました！」  
「友奈。病院で騒がない。そして園子は懲りなさい」  
「えへへー」  
「ごめんねー夏凜ちゃん」  
「氏紙君元気ー？私たちがお見舞いに来てあげたわよー」  
「今日は車椅子の品目案内書を持ってきました」  
「こんにちは氏紙さん」

入院生活が始まって代わる代わる毎日誰かしら見舞いに来ている。

本当にそんな気を使ってくれなくていいのだが、義理堅いといふかなんといふか、全く呆れるほど良い子たちで却って心配になってしまう。他人にばかり時間を割いて自分の時間はちゃんと取れているのかとか、知らない人にホイホイついて行ったりしないのかとか、いつかダメ男に引っかかって貢がされたり好き勝手乱暴されたりしないのかとか色々。

なんと言っても「この世に悪い人なんているのかなあ？」なんて言い出す始末。地獄への道は善意で舗装されていて、悪意の無い加害者なんていくらでもいる。罪はただ罪として在り、悪意の有無ではなく行為に付随される。故に、もし教育が行き届き、人々から悪意が消え去ったとしても、人類の手にしつこくこびり付いた原罪を濯ぐことは叶わないのだ。

「そーれーでー？結局、どういう子が好みなんですかー？」  
「フッ。私は 年齢、性別、容姿、性格、人種、種族、生物、非生物、有機物、無機物、概念、生死、問わず愛せるのだよ」  
「おおー！やはり、お主…只者ではござらんな…？」  
「クックック、バレてしまったか。しかしそういうお主こそ中々造詣が深いと見える」  
「「にやり(ニヤリ)」」

「じゃあ！じゃあ！勇者部の中なら誰が一番好きですかー！」  
「おいおい…そんなこと答えてしまって本当に良い(よい)のかい？」  
「もっと想像の余地を楽しもうじゃあないか…」  
「「「にやり(ニヤリ)」」」

「何だこいつら…」

「あれー？氏紙君って、ああいうキャラだったっけ…？」

「風先輩は以前、同じ組に所属されていたんですね？」

「そうなんだけど…前はこう物静かで、休み時間も一人だったし、お昼はすぐ何処か行っちゃうし…まあ 30 年も経てばキャラ変してても不思議じゃないわよね…」

「まあ、本質的なところは園児の頃から変わってないし、初めから私はこうだったよ」

「キャラを使い分けるようになったってことですか？」

「うーん、人の性格には幾つかの種類のパラメータが在って、それらのうち場合に依じてどれを重視するか？みたいな…ああ、心理学用語でペルソナとかいうやつよね」

「んん…？東郷さん、ペルソナってなに？」

「えっと…“仮面”とか“社会的な表面的人格”という意味らしいわ、友奈ちゃん」

「それって付け替えできる人格ってことでしょ？キャラの使い分けと何が違うの？」

「厳密にはそこまで違いはないけど、氏紙さんは『その場その場で言動を選んでいるだけで、別にキャラを作ってるわけじゃないよ』って言いたいんじゃないかなー？」

「さすそのっちさんの超速理解がたのもしすぎる」

「ああ、場当たりの計画性が無いってことね。納得だわ」

「とても辛辣だ」

「事実じゃない」

「まあの」

計画なんか立てても尽く hard luck に潰されるので、必然的に、何が起っても対処できる余地をという方針になってしまうのだ。だから僕は悪くない。

「で、結局誰が一番なのよ」

「あらあら、夏凜もそういうこと気になるのねー？」

「う、うっさい！だって毎日あんなの見せられてたら誰だって気になるわよ！」

「確かに…どうなんですか氏紙さん？」

「えー…」

「ほらほら白状(ゲロ)っちゃいな？楽になるぜ？」

「んー… (いやこれ、この場にはいない人の名前出したら失礼だし、いる人の名前出したら出したらで大混乱になりそうだし詰んでるよね?)」

「こーら。乃木も夏凜も、怪我人をあんまり困らせないの」

「ああ…国土さんが天使なら犬吠埼さんは聖母ですわ…」

「にゃ！？にゃによ！？」

「や、やっぱり、おお姉ちゃんのが…！」

「おお、原点回帰。転校してきたばかりで人付き合いも苦手で孤立してしまって、心細いときに、風先輩の気さくで明るく暖かな慈愛に触れてトクン…と恋情(れんじょう)を育んでいたわけですねあー！！？」

「あら…」

「おめでとうございます！風先輩！」

「おう、待て、生まれ、stay stay stay！俺のせいだけど、せっかく元に戻った犬吠埼がまた不能になるだろうが！ちょおい！止まって…」

「呼び捨てだ！」

「キャー！！」

「それに聞きました？『俺』って…」

「マジだよ…マジなやつ来たよ！！」

「ああわああわわわ」

くっ 殺 ！ ！

「…落ち着け…みんな…」

「分かった…分かったよ…本当のことを話そう…」

「だから一旦、落ち着いてくれ…」

人は無意識に相手の声のトーンに合わせようとする性質がある。

感情的なときもそうなので、激を飛ばすタイプの上司に怒られるときなども一旦相手の感情を全部吐き出させたあと、これで一気に引き落としながら謝罪すると、相手に「自分の言葉で反省させた」という支配欲に基づく達成感を与えることもできるので効果的。(ただし、感情を吐き出し切れていないうちにやると、不完全燃焼にさせて尾を引くので注意が必要だ)

今回は“相手が欲しがっている秘密の情報”という餌でも釣っている。

「ほう…“本当のこと”ですとな…？」

「ああ…そうだ…。乃木園子…」

「ヒッヒ (なんだか緊張してきちゃったよ東郷さん…！誰なのかな…！)」

「ヒッ (そうね、友奈ちゃん(でももし友奈ちゃんだったら退部していただかないと…))」

「一つずつ行こう」

「まず容姿。これは私の褐色肌好きの性癖に、ど真ん中の赤嶺友奈。  
小学生のときに好きだった子が褐色だったことに起因するだろう。  
ちなみに数10年経った今でも好きだ」

「つぎ人格。これは正直、甲乙付けるのは不可能に近い。というか不可能だ。  
みんな尊いし愛している」

「キャラクター、つまりロール。つまり振舞い。  
私は周りのために自らの人格を犠牲に捧げてしてしまうような子から目が離せない。  
自分に思い当たる節があるものは反省なさい。不健全です」

「性格。思考回路。乃木園子かなあ……愉快がすぎる。  
周りばかり見てないで、自身のことも見つめ直してほしい。  
…別に意趣返しではない…ないとも」

「言い並べてみて、無いとは思いますが、勇者部員たちは自己犠牲大好きの変態ばかりなので  
念のため釘を刺すけれど、これらに沿おうとなんて絶対にしないでほしい。  
姿形十人十色だから惹かれ合うのオーケー？」

「お姉ちゃんが居なかった…よかったけど、ちょっと複雑…」  
「アタシとは遊びだったのねー!？」  
「まったく風ったら、直ぐ浮かれるんだから」  
「日焼けっていうと棗さんや夏凜ちゃんもそうだよね？」  
「ゆ、友奈!？私はそんな焼けてないから!」  
「あれー？私の名前が挙がってたのに、あんまり嬉しくないよー…？なんでかなー」

「その数10年経った今でも好きな子に会いに行ったりは？」  
「しませんよ」  
「私は既に死んだようなものですし、過去の私から掠め取るようなこともできません」  
「てか、変態ばかりの部活ってなによ!？失礼ね!」  
「でも勇者ってそういうもんじゃん？見知らぬその他大勢のために命懸けじゃん？」

「うぐ、反論できない…！」  
「総論すると、一番は赤嶺ゆーゆってことなのかなあ？」  
「でも日焼けに弱いというだけみたいですし」  
「園子は窘められてるし」  
「振る舞いも、勇者な時点でみんな少しずつあるわよね…」

「これは…氏紙さんに上手く、あしらわれてしまったようですね…」  
「フッフッフ。十年早いわ子娘ども」  
(正直に答えただけなんだけど、なんか上手く躲せたみたいだわー)

「さて。もういい時間ですよ。そろそろ、お帰んなさい」  
「むうー、悔しいー」  
「また来るわ」  
「お騒がせしました」  
「またねー！」  
「園子。帰るわよ」  
「おやすみなさい」

「んむ」

騒がしく楽しい一時(ひととき)が終わり、カエルの大合唱と木々を揺らし窓を叩く風の音のみが聞こえる。……ついに“楽しい”と言ってしまったか。接待娘、それも未成年の子たちを無理やり宛がわれたようで非常に不快でもあるが…

神樹に「どうだ私の娘のたちは。素晴らしいだろう！」と自慢されているようでもあり……やっばちょっと鼻に付くな、このやろう。

ああ、素晴らしいとも。彼女たちは素晴らしい。

素晴らしいが、忌々しいあなた方と人の趣味がやはり似ている自分も忌々しいわ。あなた方が、これから彼女たちを、どんな目に合わせようとしているのかも想像できて胸糞悪い。

「こんばんは」

面会時間を過ぎ、消灯時間も過ぎた真夜中に、少女の可憐な声が鳴る。  
「その声は…結城さん？」

「ううん。違うよ。私は高嶋友奈です」

何故？

「この場所はどうかな？気に入ってもらえたかな？」  
どういう意味だか分からないな

「そんなに警戒しないでほしいな…。私とも仲良くしてほしいよー」  
無理な相談だ

「ひどい！どうして…」  
足音も扉の音も気配もなく閉鎖された病院の個室に侵入されて警戒しないやつはいない

なにより声のする位置には何もいない

悪魔か 悪霊か 妖怪か どれでもないバケモノか  
いずれにせよ、まともな存在じゃない

「種族、生物、非生物、概念、生死、問わず愛せるって言ってたのに…」  
嘘は無いが、貧弱な人の身である私では手に余るのよ

自己紹介と、尋ねてきた目的くらい話したまえよ

「私も嘘は吐いてないよ？私は高嶋友奈」  
「目的も本当に、この場所(せかい)は気に入ってもらえたかなって聞きに来ただけ」  
「私と仲良くしてほしいのも本当だよ？」

なるほど神の化物だったか…  
「化け物、化け物って連呼しないでほしいな…。私だって女の子なんだよ…？」  
それは失礼した  
それで自称高嶋友奈さんは神樹様とはどういうご関係で？  
「さっきから言葉がトゲトゲしてて痛いよー！」  
申し訳ないね…止めないけど  
「どうして…？どうして酷いことばかり言うの…？いやだよ…」

私知っている高嶋さんは、相手に申し訳なくて泣き落としなんてできないからな  
「私だって高嶋友奈なのに…」  
そうやって質問の本質から逸らし続けられるほど、賢くも姑息でもないのよ

「だめかぁー…」  
「だって、楓(カエデ)くん様きらいだから…言いたくなかったの…」  
既に関係者だって割れてるんだから今更でしょ  
「うう…、言っても嫌わない？」  
分かった分かった、『絶対に』嫌わないし君は高嶋友奈。それで？話が進まんよ  
「じゃあ言うね…私は」

「私は 300 年前。西暦の時代に神樹様に吸収されて、今もここに居る高嶋友奈です」

「そうかい」

「あんまり驚いてない…分かってたの？」

「神樹様として見聞きしていたのなら知っているだろう？」

「かくかくしかじか 28 ページ目『私は私の作業を邪魔されるか、大事なものを毀損される以外では、基本全てが些事取るに足らないどうでもいいこと』なのよ」

「ここに連れてこられたこと怒ってるよね…？それは？」

「私の一生という作業の邪魔に当たる」

「えー…」

「それに全てに怒っているわけでもない」

「こうして高嶋さんたちに逢えたことは嬉しい誤算だよ」

「神様でも口説いちゃうの？」

「まだ名前を呼んだだけでしょーが。でも、君がそう望むのならそうするよ。高嶋さん」

「いいよ、いいよ。くすぐったいし」

「さようか」

「左様です」

「それで『この椅子自体は心地よいと思っている』と知れたろう？」

「他に言い残すことはあるかね？」

「まるで私これから殺されちゃうみたい…」

「ただの言葉遊びだよ。まだ嫌われてないか不安なんすか」

「そりゃそうだよ…。だって、ことあるごとに忌々しいとか不快だとか言うし…」

「なら何のために私なんぞを、ここに軟禁したのか白状してみてはどうだい」

「それは「いや、言わなくていいよ」なんで?!」

「神樹様と融合しても高嶋さんが高嶋さんなのは変わらず神樹ではないから。忌々しいセリフを高嶋さんの口から言わせるほど私は鬼畜でもないし」

「自らを悔いるものに赦しと贖罪の機会を与える」

「私は GOD とは違って、冷血で慈悲深いので既に十分苦しんでいる人を咎めたりしないし、自らの罪を許せない人、また人の身では許せない罪にこそ、人に代わって赦しを与える神でありたいと私は考える」

「氏紙(うじがみ)転じて氏神だけに」

「楓くんは、神様が嫌いなのに神様になりたいのかな？」  
「嫌いだから偉そうに『俺こそが神だ』と騙ってあげてるのよ」

「その神様に向かって言うなんて恐れ知らずだね。傲慢だよ。巫女であるヒナちゃんが、神樹様をお願い事しようとしただけで大変なことになったのに…死んじゃうよ？」

「そんな話は知らないし、私はすでに死んでいる」

「家族や友達に会えなくなるんだよ？」  
「家では虐待されてたし、元からボッチで友達はいない」

「勇者部のみんなとも、二度とお話しできなくなるんだよ？」  
「高嶋さんが居るだろう？」

「本当に神様まで口説こうとするんだ…」  
「それが私の役割で役得でもあるからね」

「それに」  
「高嶋さんが言ったのはすべて、自身への言葉でもあるんだろう？」  
「彼岸で霊的存在に片足突っ込んでいて、神樹との縁(えにし)も繋がった私となら会えるかもしれないと機会でも伺っていたか？いじらしいことをする」

「私はこうも言った。  
『私は周りのために自らの人格を犠牲に捧げてしてしまうような子から目が離せない』  
天涯孤独の私などとは違って大好きな友達も家族も居たはずだろうに、神樹様に存在まで捧げて、300年も独りでお役目を頑張っている高嶋さんはその最たるものだ。不健全なので反省なさい」

「ついでにこうも言ったぞ、かくしか 10 ページ目『これが現実であったなら、勇者たちが“尊く＝素晴らしく＝愛しい存在”であるほど、私とは直接関わらせなかったし、手助けするために必要になったとしても間接的にか、気付かれないように遂行する』と、つまり

永遠の離別で草葉の陰から支える。なんてのは私の望むところなわけよ」

「敵わないなーもう」

「計画なんて立てられないって言ったのに、そんな伏線仕込んでるなんて…」

「嘘は吐いていないし伏線のつもりもなかったよ」

「ただ『何が起こっても対処できる余地をという方針』で進行していたら、なんかこうなっただけよ」

「本当にいいの？」

「後悔しないの？」

やれ、27 ページと 3 ページ目だ。

私の【後悔しないための 5 か条+1】。

- ・できることをできるだけ行い
- ・やるからには徹底的に、殺す気で行い
- ・変更を含めて道の選択は可能な限り早く決断し
- ・質に取られないために、何かが無くてはならないという状態をしらみ潰し
- ・可能な限り公正に、己に誠実に、そして矛盾なく
- ・己の大事のために役割に殉じる

後になって“よりよい選択肢”を思い付いても『それはそれ』。そのとき閃いた最善もしくは次善がそうで、そしてそれを遂行したのなら私は過去の私を誇りに思い、その私の行為を無かったことにして侮辱するようなことはしない。

「つまり後悔もない」

「そっか…」

「氏紙改め、氏神くん」

「そのうち迎えに行くね」

「おう。神らしい死神みたいなセリフだぜ」

「神様だもん。そういう面もあるよ」

「…またね」

「ふん♪ふん♪ふーん♪」

随分楽しそうですね、加賀城さん。何か良いことでもありゃしたか。

「ふふん」

「此度、わたくし加賀城雀は！命の恩人様への奉仕の喜びに目覚めたのであります！！」  
さいですか。

「あー、もっと乗ってきてよ、氏紙さーん。チュン助寂しくて泣いちゃうよー？」

けっ、まったく喧しい(やかましい)スピーカー付き車椅子だぜ。

メーカーに文句言ってやる。

「またまた、ほんとは嬉しいくーせーにー♪」

「恋する乙女とは、あんなになってしまうんですね…」

「怖い…」

「雀先輩が幸せそうで何よりです♪」

「なにあれ、砂糖吐きそう…」

「まあでも今だけだから…そっとしといてあげましょう雪花…」

「ん？どういうこと夏凜」

「私たちが、お見舞いに行ったときに『結局、氏紙の好みは誰なのか』って話になって」

「そのとき聞いたのと雀は全然一致しないのよ」

「雀先輩…」

「可哀相…」

「不憫ですわ…」

「で、でも『触れ合ってるうちに、だんだん惹かれていって』ってこともあるじゃない…？」

「車椅子係になったとはいえ、氏紙の場合、全員にそうだから…」

「あー…車椅子が取れたらリセットされちゃう…」

「褐色の肌に弱いって言ってたわ」

「それって赤嶺と棗さん？色気とクールの双璧じゃんかー」

「雀さんでは、勝てそうにございませんわね…」

「雀、可哀相…」

「雀先輩…」

「私がどうかしたのー？」

「す、雀っ！なんでもないわよ！？」

「雀先輩…」

「…なんでもない」

「え…もしかして私の悪口言ってたの…？あややまで…?!」

「コッ川（どーするのさ夏凜！本当のことは言えないし、だからと言って何も言わないと不安にさせちゃうし!）」

「ココツ（ええっと！えとお?!）」

「そんなわけ御座いませんでしょう？ただ雀さんが公衆の面前で、臆面なく殿方と戯れていらっしゃるのを見て、こちらが恥ずかしくなっただけですわ」

「悪口じゃん！！ひどいよみんな！///」

「でしたら、もう少し淑女として恥じらい慎みなさいな」

「また弥勒さんに諭されるなんて……」

「まったく、困った方ですわね…」

「姦し娘たちの姦しい井戸端会議は終わりましたかね？」

「ええ。終わりましたわ、氏紙さん」

「しばらくうちの雀さんが厄介になります、どうか宜しくお頼み申し上げますわ…」

「最近、弥勒が加賀城の保護者みたい」

「弥勒先輩は大人なんです。かっこいいと思います♪」

「ううう、私が失敗するたびに弥勒さんの評価が上がっていくー…」

=====

「いやー、弥勒さんに助けられちゃったね」

「そうね…弥勒さんにあんな一面があったなんて知らなかったわ」

「弥勒も鼻が高いわ」

「私も面白い話が聞けて、うれしいなー」

「赤嶺と蓮華…いつから居たの…？」

「んー、いつからだろうねー？」

不味いことになった…

骨は砕けたままだが、神経は無事だったので「ギプス着けて、ほっときゃ治るだろう」と軽い気持ちで私は自宅療養に切り替えた……そう…これもまた、いろんな事象に対してズボラで不感症な私のせい…なにが起こったかというつまりは一人で風呂に入れない。

これは不味い、とても不味い。

私はホームレスの経験もそれなりにあるので、私が不潔でいるのもそれなりに平気だが、それは私がズボラで、出不精で、訪ねてくる友人も無く、独り身だったからだ。

しかし現環境は愛しく愛しい勇者たちの存在があるし、加賀城が毎日のように登下校の手伝いに来るのである…さすがに身嗜みに気を遣う。

風呂無しシャワーで済ませればいい？

無茶を言うんじゃない。この部屋は大赦関係とはいえ普通の Apartment だ。車椅子で浴室に入れるような作りにはなっていないし、そもそも車幅が入り口を通過できない。

止むを得ぬ…再入院するか。

「こんばんわー。赤嶺友奈でーす」

「弥勒も一緒よ」

何故ここに、何故こんな夜更けに…

「レンちがねー？『怪我をしているのに男の独り身では、栄養バランスの取れた食事の用意などできないでしょう？』って」

「場所は、前に来た時に分かってたからね」

「それでわざわざ…？」

「そうよ」

「弥勒さんの料理はとても素晴らしく美味しいし、それは助かるけれども…」

「フッ、なら問題ないわね」

「感謝なさい。毎日弥勒が作りに来てあげるわ」

「いや、その…大変申し上げ難いのですが、車椅子生活に幾つか物理的な問題が発覚しまして、早々に再入院しようかと…」

「フッ、フフッ…その問題とやらも弥勒に任せなさい…」

「それはさすがに遠慮したいかなって…」

「問題ってー？」

「その…」

介護施設とかすごく出入りしてそんな勇者部だけど、さすがに大丈夫だよね…  
突撃は無いよね…？」

「フッ、そんなこと。弥勒と友奈で入れれば問題ないわ」

「レンチー…？さすがに私は知り合いの男の人と裸の付き合いは無理なんだけど…」

「ですよ…？なので今回はご遠慮願いたいなと…」

「大丈夫よ友奈。裸になるのは彼だけだから」

「まで待つんだ婦女子諸君、だとしても健全な男子学生のあらゆる場所を見ることになるんだ。そんなことは40を越える爺的にはさせられないし、看過できないし、決して唆されて(そそのかされて)はならないぞ赤嶺君、絶対に絶対にだから私のズボンに手をかけるんじゃない止めるんだ！」

「えー？本当は嬉しいんでしょー？」

「やめてよしてさわらないで貞操が危機だから、主に貴女たちの」

「夏凜から聞いてるよー」

「なんのことでしょうか」

「氏紙さんは一、勇者部の中では一番私の容姿を気に入ってるんだってねー？」

おのれ…

「たしかに…」

「たしかに、それは事実…話した内容も嘘偽りは無い」

「容姿だけでなく気だるげな言葉遣いも蠱惑的で男心を刺激するし、わざとなのか無意識なのか分からないが意味深で小悪魔的な台詞回しに目を白黒させられるし、小悪魔なくせて趣味(筋トレ)の話題となると途端に児女のように目をキラキラとさせてはしゃぎまわって微笑ましく愛らしく保護欲までくすぐられるし、運動していて健康的に引き締まった四肢も美しいし、日に焼かれてもきめ細かく凜々しいままの肌の上を転がる汗はまさに宝石の様相であるし、その美しさに目を奪われない男子はこの世にもあの世にもいないと断言するし、きっと腰も煽情的にくびれていることだろう。全身くまなく同時に見ていたいのにまったくもって目のやり場に困る。逆に照れてしまって視界から一切を外してしまったりする。熱く体温の高い手に指を絡ませる妄想に憑りつかれるし、ずっと強く抱きしめていたい！懐つかれて嬉しくないわけがない！声を聴くまでもなく周囲にその存在を感じるだけで常に狭心発作を起こさないかと案じるほど心臓に負荷がかかり、存在を確かめようと周囲を見回してしまうし、そしてその私の求心を誤魔化せず留め難い赤嶺の姿を視界に捉えれば、一挙手一投足の振る舞い、言動、微笑み、全てを見逃すまいと瞳孔が開き世界は明るく鮮やかな色彩を放ちだす！だが

それでも私は決めたのだから一線は超えないんだよ。『絶対に』」

「ここまでの過剰なスキンシップはお断りする」

「…あははっ！袖にしなながら口説くって、器用なことをするね」

「冗談だったんだけど、そこまで言われるとさすがに私も照れちゃうよー」

「ほんとうに心臓にわるい…殺す気ですね…」

「まあでも、ね？レンち」

「こうも友奈に差を付けられては…悔しいけれど完敗のようね…」

「それに、ここまで大差を付けて振ろうというなら、もはや清々しいわ」

「どちらが先に私を墮とすかみたいな勝負でもしてたんですか？JCの思考回路こわい…」

「あれ？私のことが死ぬほど大好きなのは分かったけど、レンちの評価はまだだよな？」

「いいのよ友奈。聞かなくても弥勒には分かるわ」

「あ、やります？」

「要らないと言っているでしょう…？貴方なら勇者部の誰にであろうと、友奈と同量の台詞を絞り出すさまが弥勒の目には見えている。だから要らないわ」

「そうなの？」

「まあ…」

「とんでもない証し(タラシ)だね」

「ちなみに皆さんが同性だったとしても私はやり遂げます」

「感心を通り越して恐ろしくさえあるわね…」

「あ、でも再入院なんてしなくても大赦に頼めば、バリアフリーに変えてもらえるよ☆」

おのれ…

赤嶺の助言により、部屋の内装を barrier-free なものに変えてもらい、登下校を滞りなく遂げ、弥勒さんご飯や、弥勒さん弁当や、God's hands Yu-Na 氏のマッサージや、GOD 高嶋さん略して神奈さんの御利益の効果なのかは全く定かではないが、異様に早く修復された私の脚は、もう頑張れば松葉杖で十数メートル歩けるようにまで回復していた。

今回の怪我の功名で、私の情報を収集不能になる事態、たとえば死亡したり重態になるなどを回避するためなら、結構な難題を吹っかけても大赦は首を縦に振ることが分かり「私には勇者たちのような精霊の加護も無ければ、防人のような装備も無いというのに樹海には必ず強制送還される」という話を盾にして、生前温めていたある道具の製作を依頼した。…本当は自分で造りたかったが、完成前にミンチにされては仕方がない。

「そして出来上がったものがこの…等身大人形ですか…？」

「正確には義体というのだよ、楠クン」

「人形…人形……私、なんか嫌なこと思い出しちゃったよ…」  
「因みに人工知能や精霊を用いることで自立稼働もできる」  
「ひっ…呪いの等身大人形…！」  
「タマ子さん、ロボットっすよ！ロボット！」  
「うむ、ロボは男のロ・マァン…。ドリルはあるのかね…？」  
「ドリルは無いです」  
「なんでだー！ロボと言ったら何は無くともドリルだろー！？」  
「義体であってロボではないので…」  
「えー違うんですかあ！？残念だなあ…」  
「氏紙さん。可動部は球体関節ではないんですね」  
「だけど、節々にモーターの類が見当たらない…まさか油圧式？」

「よくぞ聞いてくれたクスノキ君。やはり君を呼んで正解だった」

「これは腰回りと、心臓部に動力を集中させていてね」  
「そこから軽量チタン合金で出来た骨の中を通り、各部位へ鋼線と耐火耐腐食繊維を編み込んだワイヤーを張り巡らせて、人体の筋肉と置換してあるのだよ」

「なるほど、動力をボディに集中させることで四肢を軽量化しているわけですね」  
「動力を上半身と下半身で分けているのは、片方が破壊されても退避行動を取れるようにするためですか？」

「素晴らしい…Perfect だ。ご明察だよ、その通り」  
「ひとつ付け加えるとすれば重心の安定化の意味もある」

「頭の二本の角は……これは排気孔。頭部に計算機とカメラを入れているのね。けれどこれだけで冷却しきるのは難しいのではないかしら？」

「いーい質問だあ、郡君。

こいつは頭部の Air conditioner と、血管を模した Tube に通した冷却液の 2 種類の体温調節 system を採用している。動力や計算機が一部に集中しているということは、それ以外の部位は発熱することが無い…つまり！患部とその他の部位で温度差を作ることが可能であり、患部から熱を取り込んだ冷却液を端部へ輸送する過程で冷まし、再び患部を冷やしに送液する。さらに必要に応じて体表面に空けた気孔から蒸散を行い、気化冷却を起こす

ことも下腹部からの廃液も可能だ」

「徹底して人体をトレースしたのね」

「ということは冷却液の充填も」

「そうとも…想像している通り、口から摂取し、腹部の Tank に貯蔵する構造だ…」

「女性型の理由は？」

「ヒトは胎児の頃にまず女体に成長し、その後ちょっとした確率で性分岐が起こる。つまりヒトという種の neutral な状態は女性であり、精霊を宿すための依り代に都合が良いんだ。まあ、大赦側へのお礼も兼ねて、今後、防人や巫女たちの装備への転用が行い易いようにという個人的な思いもある」

「これは余談、というか完全に私の趣味で体内まで人体を模倣していたのだが、それは呪術との相性も良かったらしく、大赦の霊的技術者たちのお陰で元の構想より次元の異なる quality となった……彼らには全幅の敬意と感謝を捧げ、素晴らしい運用 data をお返しする所存」

「呪術にも通ずるものがあるよね」

「知ってるんスカ、園子さん」

「そうだねミノさん。古(いにしえ)より、ヒトガタは鬼(悪霊や死霊や魍魎(すだま))を寄せ易く、また人に近いほど依り代として強く結び付くもので、神様が自分に似せて人を作ったから巫女に神降しが行える…なんて、お話もあるにはあるんだよ」

「そういうことだ。

たとえば、簡易な呪物でも一部本物を混ぜたりして完全なものに近付ける」

「身近なところだと、対象の指定の意図もあるが藁人形に呪う相手の体の一部を込めたり、ひとりかくれんぼの人形に腸代わりの穀物と爪を封じたりね」

「そんなこんなで、もし今後私の手足が吹っ飛んでも、この技術を応用すれば精巧な義手義足となるし、体の大半が磨り潰されてもこの形代(かたしろ)に偽似精霊化させた生霊の

「がくがくぶるぶるこんなところにいられるかあ！私は帰る！」

「…だからメブも着いてきてー…！」

「たしかに、これはロボじゃなさそうだ…」



「星屑の一体でも氏紙さんに接敵させてはいけない！だからシズク！能力の高いあなた達に任せます！」

「雀さんも生き残ることに關しては誰よりも優れています！おっかなびっくりでも、死なせたくなければ貴女の大事なものを守り抜きなさい！」

「…うん！」

「ったく、死ぬんじゃねえぞ！！」

いやいや、無茶だろ。

このバーテックスの暴風雨の中で、お荷物抱えてる余裕なんてないだろうが！

「うるせえ！テメーは死なねえことだけ考えてろ！！」

「ぎゃああああー！！ああは言ったけど一歩も動けないしやばいよこれ死んじゃうよおおお！！」

「耐えろ！！」

「ひいいいやあああ！？」

今のところは攻撃的な天才の超人的な打ち返すと、予知にも似た消極的な天才の神がかった退避能力のお陰で捌き切れているが、いくら神の加護で性能を上げても体力には限界がある。それに対して敵の数には底が見えず、守りが破られるのは自明の理で時間の問題だ。ならば…お荷物は二人の隙を見て早々に死ぬべきか！？だが死んだら死んだで、二人のトラウマになってしまう！クソッ！いずれにせよ、これでは立てない！！！！

「 氏 紙 さ ん ！ ！ 」

「 氏 紙 ！ ！ 」

ゴッ！！と熱線で瞬間的に焼かれ膨張した空気の耳を割るような音がしたかと思うと同時に目の前が真っ白に暗転した……何が起こった？

閃光弾のようなもので目と耳をやられてしまったか？何も見えないし聞こえない。

地を這う虫けらを大地から奪い去らんと吹き付ける暴風は健在なので、おそらくここはまだ樹海で、おそらく私はまだ死んでいない。

加賀城と山伏さんは無事だろうか…

どうしよう…

何分？何十分たった？それともまだ十数秒しか経っていない？

時間という概念は、物質・物体の変容と移動を元に定義されている。

仮に視界に入るすべての存在が静止すれば時間そのものが停止したと錯覚するだろう。

今の私に知覚できるのは、地面があることと、熱気に肺を焼かれていることと、火傷を負った全身に容赦なく風が砂塵を叩き付けていることだけだ。

自他の把握ができなければ、時の流れも認知できなくなる。

現実感も失せてきた。

臨死体験という名の楽しい幻想は終わってしまったのだろうか…？

風が止んだ。

されど手を引くものも無く、私は小さく蹲る。

ついに地面と精神を蝕む全身の激痛と、焼かれた肺の息苦しさしか分からなくなった。

私は私が生きているのかも死んでいるのかも、もはや判らない。

地面が消えた。



どうしよう… 何分？何十分たった？それともまだ十数秒しか経っていない？ 時間という概念は、物質・物体の変容と移動を元に定義されている。仮に視界に入るすべての存在が静止すれば時間そのものが停止したと錯覚するだろう。今の私に知覚できるのは、地面があることと、熱気により肺を焼かれ、肌を焼かれ、焼け 爛れた肉が衣服に癒着し、少し動いた時に思考を止める激痛が走り、そんな私の全身に容赦なく風が砂塵を叩き付けているというくらいだ。まるで生皮を剥がされて剥き出しのところを、粗い紙やすりでゴシゴシゴシ擦られているようだ。うふふふふ 自他の把握ができなければ、時の流れも認知できなくなる。許さない 現実感も失せてきた。ギンギラギンさり気なく学校を更けてしまおうかという欲望に駆られるも水が欲しい 臨死体験という名の楽しい幻想は終わってしまったのだろうか…？「質の悪い冗談だ」と私は思った。何を言っているんだ私は なんだこれは？ 全身まともなところが何処もない。右腕これはどうなっているんだ？裂 けているのか？目が見えないのでよく分からない。低いうめき声のようなものが聞こえて『誰かいるの？』と、あなたはもしかしたら人が 焼ける臭い倒れているのかもしれない痒い痒い肉が腐っていると小さくて濡れた何かが床を移動しています…。アアアアアアアアア！！頭が！おかしい！中で何か！『なんだろう』と目を凝らすとそれは人の形をしていて無茶苦茶に手足をばたつかせながら不気味に移動する土人形…！耳があったはずの場所を左手で探っても引っかかるものが無い。火傷で掌の触覚が死んでいるのか？膝から下が動かないが千切れたか？そういえば視力云々以前に目が開かないな。脇腹も砕けていてなんだか面白い！はい。まったくその通りでございしますが、ワタクシにも止むに止まれぬ事情といたしますか不可抗力といたしますか、まあそれもワタクシのズボラとうっかりのせいなのでありますが、その 全身痛くないところがなくて、痛くないとはどういうことだったか、痛いとはどういう意味 だったか分からなくなって、自分の形も分からなくて、そういえば寒いではなかったか？息ができない？喉が痛い？なんだ？なんだ？なんだ？なんだ？なんだ？ふふふふふ。どうして？ 風が止んだ。何処にいる されど手を引くものも無く、私は小さく蹲る。加賀城はどこだ。脚が無い。腕も無い。目玉も取られた。痛い痛い痛い。返せ返せ返せ。止める離せ、ここから出せ 私はそこじゃない私はここじゃない。すでに刺すような水の冷たさも感じられない。もしかしたら背骨をやっているのかもしれない。わたしは歩けない話せない息ができない ついに地面と精神を蝕む全身の激痛と、焼かれた肺の息苦しさしか分からなくなった。何をしている、どうしてここに居る 頭が痛い。私は私が活着しているのかも死んでいるのかも、もはや判らない。え、まあそうですね。変な夢ですね。結城さん 私は誰も救えない。土居も伊予島も郡も高嶋もみんな死んだ。私は死んだ。死ね死ね死ね死ね死ね何なんだ？訳が分からない地面が消えた。私は訳が分からなくなり、手足を滅茶苦茶に振り回してみたが触れるものは何もない。誰もいない。これは？肉塊と泡と焚火？穴がある。

















「っがあ！！」

なにか巨大な壁のようなものに殴り倒され、急に意識が覚醒した。

「えふっ！はっあ！」「なんだ！？何が起こった！？」

視界良好、聴覚も無事で全身の痛みも搔き消えている。

遙か遠方には夥しい数のバーテックス。

「みんなを、探さないと！」

死なれては嫌だ！

脚に力を込めて地面を蹴ると、またもや地面が足元から消える……いや、私が空に身を投げたのだ。今になって気付いたがこれは…この体は

「なるほど…私は死んだのか」

「無理もない」

「むしろ殺されたと言うべきか」

征こう。きっと\*\*\*\*さんが泣いている。

「氏紙さんが！氏紙さんが何処にもいないよ…！！！！どうしよう…！」  
「分かってる！！だからこうして探し回ってんだろうが！！」  
「どうしよう…！どうしよう…！！氏紙さんが死んじゃってたらわたし…！」  
「落ち着きなさい、雀さん！まだそうと決まったわけではないでしょう！」  
「くっ…！間に合って…！」

「若葉ちゃんそっちは居た！？」  
「くっ…空からでも、ここまで地面が荒らされていては…！」  
「乃木さん！機動力のある貴女は戦力の要でしょう！持ち場に戻りなさい！！」  
「彼の捜索は一人で七人の私と楠さんたちでやるから！高嶋さんも戻って！！」  
「……………すまない友奈！一緒に来てくれ！」  
「郡ちゃん…お願い！！」

あれだけバーテックスが居ても、たった 20 数人程度の勇者たちで倒してしまえるのか…？半減…とまでは行っていないが確実に数を削っている。なるほど確かに、生半可な戦力では私を殺せなかったろう。

「私はここだよ」

「氏紙 楓(うじし かえで)はここに居る」

「だからもう泣くんじゃあないよ、加賀城さん」

「氏紙さん……………の…呪いの等身大人形…………？」

「そうとも。いや呪われてはないが、いや死霊が動かしているのだから呪いの人形でも間違いではないのか…?」「とにかく、とりあえず、この身体なら、もう守ってもらわずとも私は死なない」

「お腹も空いた気がするし、いい加減終わらせて帰ろうぜ?」  
「どういうこと…?」

「話の腰を折られた…決め台詞だったのに…」  
「いいから説明なさい」

「走りながらでいいね?」

=====

「とまあ、要するにバーテックスの攻撃の余波でボロ雑巾のごとく飛ばされた後、おそらく空中に巻き上げられて空から地面に落下」

「素敵に見事にミンチになった肉体を捨てて、マーキングしてあったこの義体に魂とか主体とかそういった神秘的な摩訶不思議理解不能な何かを自動転送?し、無事に私は死んで復活したんだろうということよ」

「あなた自身、よく分かっていないんじゃない…」  
「死ぬのは二度目だけど、甦るのは初めてだから仕方ない」  
「とりあえず、氏紙さんは無事…ってことでいいんだよね…?」  
「どうかしら…自動人形が氏紙さんとして振舞っているだけかも知れないわ」  
「そんな…!」

「そんなの、どっちでもよろしかろ」  
「元々すべての他人は哲学的な思考を行うゾンビと見分けが付かんのだ」

「私たちは自身のことさえ、化学的信号物質のままに反応を繰り返し、五蘊(ごうん)に流され続けるばかりで、主体または自我または魂なんてものが存在しているのかなど分かりゃしない」

「“私”とは何だ?

肉の体か？魂か？脳髓か？意識か？記憶か？思考の火花か？であれば、意識あれど廃人となり思考ができないならば、もう私ではないのか？梅毒の治療で性格が変われば私ではないのか？であれば、昨日の晩飯を思い出せなかったら私ではないのか？去年あったことを一体どれだけ覚えている？であれば、その意識で自らを肉体を制御できているのか？薬物反応に逆らえるのか？念ずれば痛みは掻き消え、千切れた腕も再生するのか？であれば頭蓋の中が物理的に空っぽなのに会話し勉強し就労し生活していたものは生きていなかったのか？首を落とされて18ヵ月いつも通り動きまわり餌をとっていたチキンほどの段階で死んだんだ？水槽に浮かぶだけの脳髓に自我が残っているとどう証明する？脳波を測っても結局刺激への反応でしかないし脳波の絶えた植物状態の人間が蘇生し、意識無く脳波も途絶えていたはずの間も語り掛ける家族の声が聞こえていたし握られる手の感覚もあったという報告はどう捉える？であれば、魂とはなんだ？どこにある？何のことをそう呼んでいる？であれば、体組織の7割を人工物に置換したものは生きていないのか？人間は半年ですべての細胞が新しいものに置き換わり代謝されるが、もうそれは私ではないのか？」

「…郡さんこそ、それは自意識(自我)どうなってんの？とても興味あるわよ」

「や…死者蘇生なんて稀な体験で、ちょっとハイになってて、ちょっと口が走りました」

「忘れてね、ごめんね…」

「まあ…ともかく、生死の境とは曖昧なものなのだとしたことよ」

「ほんと、ごめんね。なんか変なこと聞かせて…だから泣かないで加賀城さん…」

「うぐっ、ひぐっ…」

「いえ、私も少し意地悪を言ってしまったわ…ごめんなさい」

「氏紙さんで間違いないのね」

「そうとも。私こそ私で、私とは私なのである」

そう。自己など確認しようもなければ、証明のしようもないのだから。

自他をどのように定義し/線を引き/自認するかの問題でしかないのだ、結局は。

たとえば、あの時点での私と、今の私が連続していなかったとしても同じこと

だから人でなくなった君も、そう己が自認するのなら高嶋友奈だよ。私が承認する。

私たちは勇者たちに合流し、簡単な説明をした後、彼女たちは私に気を遣う必要が無くなったためか、瞬く間に半数を撃滅し、満開？という機能を使用して超大型バーテックスも解体され、今はもう手堅く残党を処理するのみとなった。お荷物さえ居なければ星屑など相手にならんということか。

「というわけで戦闘力は無いままですが、後衛組と一緒に居るだけで、そう破壊されることもなくなった不死身の氏紙さんです。今後は同性として、気安く、下の名前で御呼び下さいます。よろしくお願いします」

「まさか、氏紙さんが女の子になってしまうなんて…」

「ちょっとだけ残念ですが、可愛いので、それはそれでアリだと思います！」

おっと、妄想を広げているだけなんだろうが、傾国しかねない美少女にそんな台詞を吐かれると、男子たちは直ぐ勘違いを起こすので程々にするんだぞ？オネーサンとの約束だ。

「きゃあ！ありがとうございます！」

ブレねえなあ、さすがだ、伊予島さん。鍛え方が違うね。

犬吠埼姉妹と違って、安心して口説いていられるそのままの君でいてくれ。

「おー、終わったか」

樹海が解ける——



「いえ決闘などと言わずお譲りします。どうぞお幸せになってください。ひゅう」  
「え…？」

「ひゅおほっほっほほお、尊い！！尊い…！最高だよ、カエデせんぱい…！！」  
「はふう…はあ、煽りに煽り抜いて自らを悪人に演出し、それに反抗したら！自動的に、散りばめられた素敵ワードを履行することに…！！素敵です…！素敵です！！」  
「右手が止められませんんんん！！！！」

「自ら進んで園子たちに餌をやる人間が現れては…一体、私はどうすればいいんだ…！」  
「もうどうにもならない…。これまで貴女は良くやっていたわ乃木さん…でも、もう手遅れよ…」

「うう、ちかげえ…」

「ちか×わか、わか×ちか、どちらもクールな関係なのに何処からか温かい絆がときより垣間見えてきて、いつからか目で追うようになってしまい、ついには其々の本命の想い人に隠れて逢瀬を重ねて『後ろめたい…こんなの止めなきゃいけないのに…でも…』と背徳感がむしろ刺激的で甘くてときめいてしまう二人は止められない止まらない！次第にエスカレートして行き密で熱く親密で濃密な関係にいb wっあっはふっいあああ！！！！」

「ちょっ！？やめなさい園子さん！！」

「まあ……………」

「ちちがうぞ、ひなた！」

「信じてくれ！千景とはそんな関係じゃない！！」

「高嶋さん、私は！私はあのっ…だけよこの人とは何でもないのよ！！」

「仲良しなのは良いことだよね、ぐんちゃん♪」

「あー…なんか誘爆しちゃったみたいね」

「あんたのせいでしょーが！！何とかしなさいよ！」

「投げられた賽は、Satan が眠る地の底に墮ちきるまで、何処までも何処までも止まることなく転がって行くのだた…次回 yyyi74 話…」

「なーげーるーなああああ！！！！」

「…ひとつ、私に考えがある」

「ただしそれには夏凜…完成型勇者の君の協力が必要だ。やってくれるか…？」

「…しょうがないわね。この完成型勇者の実力をを見せてあげるわ」

「ありがとうございます…貴女なら、きっとやってくれると信じていた…では」

「ちょっと機能停止チューの犬吠埼さんに白雪姫よろしくチューして来てください」

「任せなさい……………」

…ってちちちちちゅー?!ちゅー!？」  
「あー…頬や、おでこでも構いませんよ。ちっ」  
「うーじーしいいいいい!!!!」  
「えっ!?夏凜ちゃん、風先輩にチューするの!？」  
「あら…」  
「しないから!」  
「あーあ残念だ、所詮は煮干し大好き勇者だったわ」  
「煮干し関係ないでしょお!!」

「うわー…みんな楓さんの掌の上だわ…。近寄らんとこ」  
「そういえば秋原さん」  
「ひい!見つかったっ…!」  
「…怖がりすぎでしょ」  
「なんでしょうか…」  
「いえ、呼んでみただけで特に用は無いです」  
「そ、そうですか。じゃあ私はあの辺に用があるんで…」  
「秋原さん」  
「ひっ!何なんですか、止めてくださいよ!私をからかって面白いことないですよ!」

「いえ…秋原さんと話す機会ってあまりないなあと」  
「そうですね。でも私なんか構ってないで雀とか雀とか雀とか雀が寂しそうに、こちらを見てますんで、雀の相手をしてやってください」  
「今日は雀の気分じゃないんで」  
「寄るなクズ男!」  
「その言葉が聞きたかった」

「何なんですか、本当に止めてくださいよ」  
「そうね、調子に乗りすぎました。ごめんなさい」  
「私はみんなほど優しくありませんからね。もう」  
「たしかに秋原さんは何処か一歩引いていてクールな感じで、だけど実は結構悪戯好きな可愛い美人さんですけど」  
「いやいや、そんなことはありませんって」  
「それにこうしてクズ野郎とも会話をしてくれるんですもの。めっちゃ優しいですよ。そんな秋原 雪花(あきはら せっか)さんが大好きです」

「ははは、ありがとう御座います。でもそんなこと言ってたらいつか刺されますよ？」  
「愛した人に刺殺されるのって、ちょっと、ときめきませんか？」  
「えー、私は嫌ですよ刺されるのー」  
「耽美に romantic で素敵だと思うんだけどなあ」  
「まさかそのために手当たり次第なんですか…？」  
「いやいや、それはそれですよ。命を奪われ永遠に想い人に所有される憧れと同時に、愛しい君たちに私を殺させるわけにはいかないという矛盾するようで矛盾しない板挟みがですね」  
「相手のすべてを受け入れたい。相手に自分のすべてを捧げたいというその心…覚悟…」  
「解ります…」  
「分かっていますか東郷さん…」  
「私だって友奈ちゃんが望むのなら、身も心も命もすべて捧げますもの…」  
「東郷さん、貴女も…」

「東郷クラスに重い愛だった……それを全員に向ける氏紙さんってなにそれ怖い…」  
「楓さん浮気は良くないと思うなー？」  
「うえ、赤嶺さん…」  
「なにその反応ー？……あの夜、あんなにたくさん甘い言葉を囁いてくれたのに…あんな熱いの私初めてだったのに、ひどいよ…」

「わざとだろ！？わざとだな！？誤解を招く言い回しは、やめろお！！まじで！！」  
「ほんとなの氏紙さん…？私は、雀はもう要らない子なの…？！うっうっ」  
「友奈。あの夜は弥勒も一緒だったわ。付け加えなさい」

「不潔…」

「最低ね…」

「外道ですわ…」

「ひどいです…」

「クズ…」

「前言撤回！理解できるなんてとんでもない、万死に値します！」

「みなさん違うんです、誤解なんです、私めは「気を付けてみんなー。楓さんがまた言葉巧みに私たちを騙そうとしてるよー？」ちよっ「人を騙すのに嘘を吐く必要はないって言ってたもんねー？楓さん」赤嶺え！！」

「まー、楓さんの言う通り、みんなが考えているようなことは何もなかったんだけど」  
「また殺されかけた！」

「ふふっ、因果応報よ」

「んー？なんや、ウチだけ仲間外れかいな。寂しーなー」

「えー？だってシズ先輩…ごによごによごによ」

「あっはっは！！そら、あかん、途中で嘔出してまうわ！」

「でしょー？」

さて、そろそろ。もう、いい加減ね？

いい頃合いです。

楽しい時間も、賑やかで刺激的な日々も畳んでしまいましょう。

待ち人のところへ向かいましょう。

「むー、むうー。むむむむ。むっ！」

「そーのこ！なに唸ってんだ？」

「ミノさん、わっしー」

「どうしたの？そのっち」

「カエデ先輩が全方位にフラグ立ててて、ちょっと心配なのー」

「旗…？」

「あーたしかに、ちょっと心配になるの分かるなー」

「ねー？私はメモ帳が増えて嬉しいけど」

「まあでも本当はアタシらのお父さんより歳が離れてるわけだし、しょうがないのかも」

「園子先輩もこの前言ってたんだー」

=====

「氏紙さんはね？そのっち」

「みんなのことが大好きだけど、その大好きは恋愛的なものではないんだよー」

「自分の子供か孫を見るようでもあるし、私たちが尊いチョメリを見てるときの感情にも近いし、単に人として好きとか、容姿を褒めるときもどこか美術鑑賞的」

「だから誰とも一線を越えない」

「だけど口説いてるときの言葉は直球で、しかも本気だから大変なんだよね…」

「見た目もオジさんじゃなくて、私たちと同世代に若返ってたし、今は可愛い女の子」

「繰り返し口説いては来るのに絶対に一線を越えようとしなから紳士的にも見えるし」

「困っていたら体を張って助けてくれるし、危ないときは神樹様の加護があるわけでもないのに命を張ったし、イタズラしても怒らないで注意してくれるし、線を越えないお願いならみんな聞いてくれるし、からかっても口では嫌だって言うけど可愛く照れたりもしちゃうし、格好付けるけど結構抜けてたり、普段と真面目モードとのギャップも中々…」

「少しでも恋愛的に受け取ったら、絶対に報われない悲恋になっちゃうんだよ」

「本人に悪気が無いのも困りものだよね…」

「本気にさせても、相手のことなんて知らんぷりの無責任男ということでもあるから…」

「だから、そのっちも気を付けてね」

「なるほどなあ…」

「たしかに、そういうことよね…」

「私たちはまだ小学生だから、褒められても冗談だって思うけど」

「他の人たちにとっては違う…か。そりゃさすがに園子も心配になるか」

「そういえば私も楓さんに褒められるけど、胸のことは一度も言われたことがないわ」

「そう！」

「女誑しで調子者だけど、ちょっと紳士的なんだよ！」

「だから言われ慣れたところに、そういう一面に気付いて、ころっと…！」

「でも本人にその気は無い…」

「悪魔的だわ…」

「やや？今日はまだ小学生だけか」

「噂をすれば影！！」

「悪魔がやって来た！ここはアタシたちに任せて逃げろ！須美！」

「そんな！二人を置いてなんていけないわ！銀！」

「へっ…いいのさ須美さん。黙って、俺たちに守らせてくれねえかい…？」

「そんな…！そのっちまで…！」

「クックック…そんな体で何ができる！」

「それでも！」

「私たちは勇者なんだ！」

「姫を！」

「人々の希望を！」

「『守ってみせる！！』」

「良かろう…ならば逝くがよい……………死に逝く者こそ美しい…」

「って、なんなのさ君たち」

「あはは！カエデさんのそういうところ、アタシ好きです！」

「いやだわ、恥ずかしいわ銀くん…」

「おお！！？ミノさんが魔王の手に墮ちたー！」

「嬉しそうね、そのっち…」



もう一度、聞くけど、本当にいいの？

良いと言っている。くどいぞ。

あんなに楽しそうなのに…黙ってお別れしちゃうの？

そうだ。みんなの記憶は消してもらいな。

ずっとみんなと一緒に居たいと思わないの？

やっぱり、この世界に連れて来られたのが嫌だから…？

もう…本当にくどいな…今更、聞かなくとも見て来ただろう？

君たちの世界は素晴らしく残酷で、不条理で、理不尽に素敵だよ。

この選択は間違いだと思わない？これまでだって…

いい加減にしろよ GOD。黙って私に、ちょっとだけ救われてろ。

むしろ、この結末以外は天神に誓って私が認めない。

ちゃんと、あそこでの私の役割は終わらせただろう…？あとは貴女だけなんですよ…

でも、楓くんが救われない…それじゃ私が受け入れられない…

逆だ。君が救われない限り、私は報われないし救われない。

頼むよ神様…

このメシアン・コンプレックスを憐れだと思ふのなら、救われて救ってくれ。

お願いします…

わかった。じゃあ楓くん。

ありがとう…

その身体半分貰うね？



「きゃうあッ！！？」

「うわあ！びっくりした！！」

「変な夢でも見たの楓さん？」

「え、まあそうですね。変な夢ですね。結城さん」

「そっかー…ごめんね？」

「なんのことですか…？」

「実はさっきから、牛鬼が氏紙さんの頭を齧ってるの…だからそのせいかなって…」

「ぬおう！？あ、消えた」「いえ、良いんですよ。気にしないでください」

「ありがとう！それじゃ、楓さんまた明日！」

「はい。お疲れさまでした」

浮気はダメだよ、楓くん？

頭の中から幻聴が聴こえる…！！

あなたは死んだはずだったが、多分宇宙が減ぶまで死ぬことはできない

おわり